
とある死神の娯楽遊戯

アポリオン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある死神の娯楽遊戯

【Nコード】

N6192U

【作者名】

アポリオン

【あらすじ】

この物語は「とある禁書の禁書目録」のストーリーに主人公の「岩見祥吾」がちよくちよく関わっていくという物語です。他の作品のキャラ達も出るかもしれませんが。主に「東方project」や「狂乱家族日記」のキャラ達ですが。

この小説には二次創作なので、独自の設定・推察・解釈・キャラの崩壊・チートキャラなどが多々あるかと思われます。それが嫌いな人はすぐに戻る事をお勧めします。

後、オリキャラは作品が終了するまで常時募集しています。気軽にメッセージや感想などで、応募してくださいね。待っています。

挿絵に関しては権利者様の許可を得ているので、問題ありません。

登場人物紹介（初期設定）（前書き）

とりあえず、木山先生の事件が終わるまでは続けるつもりではあります。

登場人物紹介（初期設定）

主人公

名前：岩見祥吾

年齢：27歳

生い立ち：20年前に無差別放火魔によって住んでいた家と家族を失い、復讐の為に自分もまた無差別殺人鬼になるという過去を持つ。現在はもちろん全国指名手配犯である。ちなみにすでに仇である放火魔は自身の手で殺害済みの様子。何度か政府要人暗殺請負人「死神」として殺人をよくやっており、その他には密偵のお仕事も数回行い、その際の成果は上々のものだったようだ。そのどちらも気まぐれでやっていたようで、報酬は現金、しかも携帯できる量と依頼人に釘をうつていた。

性格：人と接するとき、愛するか殺すか無関心かという極端な感情しか持てない。基本的に好戦的で、感情の赴くままに多くの人間を理由なく殺害し、自分の中に理由なく溢れてくる闘争心と憎悪に溺れ、常に暴力の中で生きてきたことから、身の回りに暴力がなくでは生きられない性質を持つ。ゆえに「イライラした」という理由だけで常に標的を探して襲撃、相手を逃がせば執念深くつけ狙う危険人物で、数多くの人物から「人間じゃない」とまで称されている。その生い立ちから銃を持つ警官複数を生身で倒すなど、戦闘能力も極めて高い。その暴虐さゆえ「射殺やむなし」とまで言われている。家族が殺害されて以降は、「泥を食ったことがある」と語るなど浮浪者のような生活をしてきたらしく、その名残からかトカゲを焼い

たり、生卵数個をコップに割って一気飲みしたり、ムール貝を殻ごと食べたり（噛み砕いたが飲み込み切れなかった貝殻の破片は流石に吐き出す）と、人間の域を超えた悪食ぶりを見せる。

常に闘争心とイライラに支配されながらも、目的のために他人を幾度となく騙して利用するなど、頭も非常に回り戦闘時にもその傾向がみられる。

また途中で辞めているとは言え、高校や仕事をしていた事もある他、自動車を運転する際はちゃんとシートベルトをし、焼きそばを食べる際はお湯を捨てるなど意外と律儀なところもある。そして意外にも女性や子供には優しい。でも、あまりに身勝手・理不尽・ふざけた人だとイライラして殺そうとする。

ちなみに好みの女性のタイプは、性格は従順で髪型はボブカットに近いもの。それ以外は特にこだわっていない。（胸に関しては特に選別基準ではないが、どちらかというとき大きい方がいいらしい。）

どちらかというとき五和のような子が好きの様子。次に初春や佐天だという（佐天はボブではないが、性格が気に入る模様）。年齢で考えると中高生が好きで、熟女や人妻は嫌い。案外好きな人には尽くす性格で、その時はイライラもなくなってくる。その人が危険に陥るなら自分の命を顧みずに助けにいたりもする。基本美人であれば仲良くなるうとするが、性格がわがまま・高飛車・イラッとするような言動などであれば脅して従順にしようとする傾向がある。そして相手に対するイライラが一線を越えれば殺そうする。インデックスあたりが危ないかもしれない。

特に無理難題でもない限り女性の頼み事は基本的に聞く。理由は「好かれないから」であり、これは幼いころに家族が殺されてしまい、愛されることがなくなってしまったからだと考えられる。

上記の通り男性に関しては基本「殺す」対象ではあるが、心を開いた者は例外であり、食事に誘うほどにまで仲良くなることが可能である。ちなみにサディスト。酒には強く、酔った奴を肴にするレベルではあるのだが、自分からは飲む事はない。飲まないかと誘われ

た時のみである。超能力への関心は殺すが面倒になる程度。魔術に
関しての知識は全くの皆無。お酒はあまり自分からガバガバ飲むタ
イプではなく、誘われたら飲むというより、誘われたら大抵の事は
快く乗ってくれる。特に美少女のお願いなら尚更。ノリはいいほう
であるが、性格が酷い場合はキツパリと断る。

装備：シンプルな形の般若の仮面、腰から下げた西洋刀、逆にきつ
ちりとしたビジネススーツ、ブランド物のショルダーバック（大抵
の持ち物はこの中に所持）。スミス&ウェッソンM500。500
S&Wマグナム弾という専用の弾丸を用いる、世界最強の拳銃。そ
して自作した手榴弾数個。威力はある程度調整可能で、数個使えば
乗用車もスクラップに出来るほどのモノや、目くらましに使う閃光
弾。花火程度のものも作成することができる。もちろん原材料がな
いと作成は無理な模様。

外見：上記のとおり、もはや冗談としか言えない容姿をしている。
いつも般若の仮面を着用しているが、外すと火傷の跡（家が放火さ
れた際に左眼辺りを火傷）があるものの美男子である。その醜い傷
を隠すため、仮面をとろうとしない。取ろうとすると例え誰であろ
うと、極めて冷酷で殺意に満ちた目で威圧する。身長は174cm
ぐらい。

通り名：通称死神。名前の由来は上記のような外見に加え、容赦の
ない連続無差別殺人が原因だと思われる。

活動範囲：学園都市全域。そして神出鬼没。が、戦いが起こってい
る場所には血の匂いを嗅ぎつけて高確率で現れるようである。

住家：全国指名手愛犯なので今の所は特定の家を持たず、野宿であ
る。

特殊能力：特にこれと言ってない。

戦闘能力：戦闘力に関しては、並みの能力者を圧倒するレベルである。戦闘力を能力者レベルで表すと、軽く見積もってもレベル4上の上クラスに相当し、最悪レベル5上の中クラスであると噂されている。刀を主に使うが我流で、「斬る」や「突く」というよりは、「叩きつける」といった豪快な力押しでの戦闘を好む。そしてこれが通用しない場合は、抜刀術や突き技にすぐさまシフトする。瞬発力や短距離の移動速度については武術を極めた人間でも見切るのことは難しい。長期戦も苦手ではないが、面倒なので避ける傾向がある。常に戦いの中に身を置いていたため、眼光が鋭く、大抵の者はこれを見るとしばらく動けなくなる。ちなみにこの眼力、リラックスしている時は緩む。身体能力に関しては、一般的な常人のそれとは比較にならないほどに高い。西洋刀なしでの戦闘を行うことも可能で、どこで学んだのかは不明だが、主に拳法を使う。（殺しを目的とする戦闘を行う場合、決まって「イライラするんだア・・・！」という言いながら、首を回すという癖を持つ。）

岩見祥吾のイメージ画像。本来の祥吾はこれを男にしたような感じ
です。

> i 2 8 3 7 1 — 3 6 7 1 <

登場人物紹介（初期設定）（後書き）

紹介文と違う行動をすること多数あり。

あと登場キャラクターは作品が終わるまで常時募集しておりますゆえ、どうぞドシドシ応募してくださいな。応募は感想からか、メッセージでお願いしますね。

能力者の場合、主人公と戦わせることが多くなるかもしれません。

プロローグ（前書き）

さてさて、死神・岩見祥吾の物語が今始まりますよー

ブローグ

苛々する。だから仕方ないのだ。苛々した時は糖分なのだ。糖分で足りなければバナナだ。バナナに含まれるセロトニンという物質がストレスを撲滅してくれるのだ。

だから砂糖で固めたバナナのお菓子を食べ続ける事は何も変ではないのだ。

うん。

お菓子を食べ続ける正義！

不快や苛々と戦う正義！

ひいては、心穏やかに毎日を健やかに過ごすための正義！

「うわああああ！！！！」

「助けてくれええ！！！！」

だから全くもってバナナで固めたお菓子を食べる為に、ここ学園都市のとある学区のとあるコンビニを強盗するのは何も可笑しくはないのだ。

「いや、まさかここまでの効果を発揮してくれるとは思わなかった」

男は先程コンビニから取って来たバナナ菓子を食べ終えてからそう言った。見るからにストレスとか、悩みがなさそうな満足そうな

顔である。

このシンプルな形の般若の仮面、腰から下げた西洋刀、逆にきつちりとした黒のビジネススーツ、ブランド物で迷彩模様のシヨルダ―バック。

これでもう、目立つなという方が無理難題である。もはや冗談としか言えない格好だった。

しかし、般若の男はそんな事はほとんど頓着せず、群がる警備員アンチスキルに菓子袋を放り投げ、代わりに手にした西洋刀で切り捨てる。

この般若の男は「岩見祥吾」といい、今まで「イライラした」という理由だけで、善人・罪人問わず千にも上る人間を殺してきた全国指名手配の連続無差別殺人犯である。

そんな恐ろしい殺人鬼が何故この全世界で最も科学技術が発達している学園都市にいるのかというと、つい二週間前の事。常時イライラしている岩見祥吾は、何かこれを無くす案はないものかと悩んでいた。

そんなとき、テレビで学園都市には超能力者やスキルアウトと呼ばれる武装集団がいると聞き、警察の追手をかいくぐりながら、ちょうど一週間前、ここによく着いたというわけである。

そして、すぐにスキルアウトの連中がたむろしている第10区に行き、一通り蚊みたいに纏まりつき、因縁つけてくる連中を皆殺しにし、財布と現金を抜き取り、殺しても誰にも悲しまれないようなチンピラ1人のアパートに押し入り、住人を殺害。現在もその住居に在宅中である。こんなチンケな所ではすぐに足がつくだろうが、その時はその時。追手を殺せるだけ殺して、また逃げるだけだ。

という人の命を虫ケラ以下としか考えない常識外れな思考をしたのち、何気なくテレビを見ていたら、なんでも砂糖とバナナにはイライラやストレスを撲滅する成分が含まれているそうではないか。

しょうもないチンピラの十数人を殺したところでイライラが収まらなかった。元々甘党であった祥吾は早速近くのコンビニでバナナ菓子を強盗したのち、自宅に帰ってそれを食べた。するとなかなか美味しい。

そう思いムシムシ食べていたら、いつの間にか盗ってきたバナナ菓子がなくなってしまった。その頃にはすっかりイライラを消え、あの頃の、家族がいて、楽しく、豊かで、幸せだったあの頃の記憶を思い出していた。

祥吾は20年前に無差別放火魔に家を燃やされた。助かったのは祥吾だけ。他の家族はみるも無残な姿に焼け死んでいた。

その時からだ。祥吾が言いようのない、底の見えないイライラに支配されていったのは。それからというもの、祥吾は感情を無くし、無表情・無感動・無愛想・無気力という「どうしてそう無ばかり集めるんだろうな」と言われるくらいに感情が「無」かった。

丁度祥吾が12歳の誕生日。一応父親の兄である叔父が腎臓の病気を持ちながらも、一生懸命に育ててくれたので、感情が全くないという以外は何不自由ない暮らしをしていた。

そんな時、何故12歳の誕生日だったのか今でも考える事はあるが、分らない。

何故あの日。祥吾が叔父と一緒に12歳の誕生日を祝って、布団に眠っていた頃。

眩い光で、眼を覚ました祥吾は、その光を発している少女、を見た。

長く伸ばした虹色の髪。かすかに揺れる背中の羽。額からは触角を伸ばした・・・そう、さながら、蝶を擬人化したような外見の少女がいた。

可愛かった。

今考えると、初恋、だったかもしれない。

その祥吾よりも少し年上に見える少女は優しく、にこり、と笑いかけ、祥吾のまだ幼さが残る手を掴んだ。

少女の手は柔らかかった。小学生の祥吾が強く握ったら潰れてしまうのではないか、と思ってしまうくらいに。

祥吾は少しばかり赤面した。久しぶりの感情だった。そして照れて少女から顔を背けてしまった。家族がいた頃は人見知りする祥吾だったが、家族が殺されてからはそんな事は全くなくなってしまった。

だが、その傾国の少女は、3年ぶりの、それこそ祥吾にとっては、何十年にも感じられるほどに長い間の無くしてしまった感情を取り戻したのである。祥吾も自分が照れて赤面していることにかなり驚いていた。

そして少女はこう語りかけた。

「岩見、祥吾君…だったわね？」

祥吾は黙ってうなづく。少女の声は本当に、本当に慈愛に満ち溢れていて、不幸のどん底にいた祥吾を救いあげてくれた。そして少女は言葉を続ける。

「祥吾君…あなたの家族…お父さんやお母さん、弟や妹を殺した人間が憎い？」

人間という妙な言い回しを少し不思議に思う祥吾だったが、そんな疑問はすぐに消えた。その問いにすぐに、うん、と答える祥吾。

「そう…なら…祥吾君、死神になりなさい」

「しに…がみ…？」

死神という聞き慣れない単語に首を傾げる祥吾。

「そう、死神。祥吾君、君は強くなりたくないかしら？ 誰よりも

強く、化け物達をただ純粹な破壊力だけで倒せる存在に。君の仇を殺せる存在に」

仇。

連続無差別放火魔。

祥吾の表情が、パァーっと、明るくなった。思えばこれ以前から狂気に目覚めかけていたのかもしれない。

「そう。思い出して。君の原点。君の出发点。そして理解して。君がもし過去を忘れ、全てから逃げる道を望むなら、そのまま平凡に暮らせばいい。けれど…復讐を望むのなら、仇の血を浴びる事を人生の目標にするならば…死神になりなさい」

少女は祥吾を引き寄せ、強く抱いた。

とても良い、華の香りがした。

「君にはその素質と資格があるわ」

そう耳元で囁いた。くすぐったかった。

「ただ…覚えておいて。」

少女は祥吾の顔を真剣に見据え、こういった。

「死神になるという事は、人間を辞めるという事。その意味をよく覚えておいて…そして、それすらも理解して君が死神になる道を望むなら、私は歓迎するわ。きっと君は最高の死神になる…」

「死神」

祥吾は呟いて、胸の中で思考を反復する。

崩れていく幼き頃の住まいが見えた。燃え散っていく両親が見えた、兄弟が見えた。叔父との記憶が見えた。これまで暮らした日々の記憶が…見えた。

「僕は…死神に…なる」

そういった瞬間、少女は消え、その後ろで輝いていた光も消えた。幻だったのだろうか？そう思ったが…すぐにその考えは否定され

た。

何故なら。

すぐ目の前に、般若の仮面と西洋刀、そして黒いビジネススーツが置いてあったからである。

祥吾は何かに惹かれるかのようにその三つを身に付け、立ち上がった。すると。

3年前祥吾の全ては奪った放火魔の顔が見えた。祥吾は走った。近くに奴がいるような気がしたから。

そして、外に出てみると…本当にいた。あの憎い放火魔が。

なんとヤツは、今この瞬間自分と叔父が住んでいる家に火を付けようとしていたのだ！

すぐに祥吾は全速力で走り、手にしている西洋刀で放火魔を斬った。

血がスーツに、西洋刀に、そして般若の仮面にかかった。気にならなかった。

そんなことよりも、憎い仇を自分の手で殺せた喜びの方が大きかった。

笑った。久しぶりに大笑いした。しかし、それは狂気を含んだ、とてもおぞましい笑みだったのである…。

それからというもの、学校で、近所で、バイト先で、仕事先で、自分を不愉快にさせる奴がいると深夜2時。丑三つ時を回った後必ず殺しに行った。

快感だった。

人を斬るたびに自分が化け物になっているのを感じた。

そして、19歳になる年、流石に不審に思った近所のおばさん共が警察に依頼し、祥吾の近所を探らせた。そして数日後…祥吾は見

つかった。

追いかけてきた警官を斬り殺し、そのまま逃走し、現在に至るわけだ。

話を戻そう。

祥吾はそういった昔の思い出に浸っていた。あの12歳の夜以降あの妖艶な少女には会っていない。出来ればもう一度会いたいと、あの時に抱いた思いを、好きという感情を、「告白」という形で自分を救ってくれた少女に打ち明けたいと祥吾は思っていた。

そういえば、あの少女消えた後に現れた、般若の仮面、西洋刀、黒いビジネススーツは不思議なことに祥吾の成長に会わせて、サイズが大きくなっていた。だから、いつもピッタリだった。一体どういう仕組みで出来ているのか。学園都市に來た理由はそれを調べる為でもあったかもしれないが、祥吾はこの三点セットを自分の命と同じくらいに大切に思っている。ゆえに名を知らぬ、どこぞのマッドサイエンティストに預ける気などさらさらなかった。それにしても、と祥吾は思う。

いくら、イライラを解消する成分が含まれているとはいえ、あれほど消えなかったイライラをたかが数袋食べただけですっかり消してしまふなんて…これをもっと早いうちに食べていたら、俺も普通の生活を送っていたんだろうか。

だが、そんな考えを祥吾はすぐに頭から捨て去る。今の考えは、これまで送ってきた死神ライフを否定するものだったし、同時にあの少女の存在も否定しているような気分がした。

申し訳ない気分だった。

そんな事を考えるうちに、またイライラが募ってきた。そして、それを無くすためにまた祥吾は、先程襲ったコンビニからさほど離れていない別のコンビニへと向かうのであった。

そんな、イライラしてはコンビニを襲い、菓子を奪って自宅に帰り、自宅に帰ってむさぼり食うという生活を送って早一瞬間。流石にこのままではまずい、という考えに至った祥吾はまた別のストレス・イライラ解消法を探すことにした。

幸いこの学園都市には美少女が数多くいるという。
それを踏まえつつ祥吾が思いついた作戦がこうだ。

『女の子と恋愛しよう』

理由はこの歳になってもまだ「未経験」だったので、魔法使いになる前に早く済ませてしまおう、と内心焦っていた。自分の力には死神としての能力で十分。魔法使いなんぞになつてたまるものか、と思っていたのである。もっと欲望をさらけ出してしまえば、初恋の少女としたかったのではあるが。いつ現れるか分からない相手ゆえ、そう言つてられない。

なんとも人間離れした死神が考えるには似合わなさすぎる不純な目的。所詮死神・岩見祥吾も人間の男だという事か。ある意味親しみを覚えるが。

そんな事はお構いなしに祥吾は都市の中心地へと足を踏み入れよ

うとしていた。

この後、今まで以上の狂乱めいた日々の幕開けとも知らずに……。

プロローグ（後書き）

読んでいただいていたかがあったでしょうか？感想・アドバイス待ってます！><b

ちなみに一応祥吾は、コンビニからバナナ菓子を奪い去る時、代金以上のお金を店に残して行きます。変に律義です。

第1話「電撃使い（エレクトロマスター）」（前書き）

記念すべき、第1話！超電磁砲^{レールガン}のキャラ達も今回登場しますよ～
^

第1話「電撃使い（エレクトロマスター）」

「いけないいけない。この格好じゃまた警備員アンチスキルの連中がハエの如く集まってくるからな」

と、慌てて自宅に帰宅した祥吾。流石に殺人鬼として知られる姿でナンパしようとは思わなかったようである。

「これでよし」

数分後着替えが終わったらしい祥吾。青色のジャージ、火傷がある左眼には絆創膏ばんそうこう、靴はスポーツシューズという、般若の仮面時に比べると至って普通の服装である。そして仮面、西洋刀、スーツなどは全て迷彩模様のショルダーバッグに詰め込んだ。普通の格好をして出かける時は死神としての持ち物である3点セットはいつものバッグに入れて行く。ちなみにジャージと靴は昔スポーツ用品店から盗ってきたものらしい。一応代金は店内のどっかに置いてきたので、本人は盗んでいないつもりらしい。それよりも、メチャクチャにした内装の片づけとかの費用が大変なことになっていそうである。

そして気を取り直して、学園都市の常盤台中学近くの橋までやって来た。その橋には少女がおり、缶ジュースを飲んでいた。

「ん？…あれは常盤台中学の制服…今日はツイている」

こんなセリフを口走ってしまったては、どこのド三流だというツツコミが入ること間違いないのだが、この岩見祥吾、間違いなく千の生き物をその手で殺してきた真正正銘の人の形をした化け物である。

丁度その時、しょうもない不良達が少女の周りに集まってきたの

である。

ここで少女を助ければ、好感度アップ！と張り切って橋に向かう祥吾。どこぞの美少女ゲーでもやっているつもりだろうか。

「全く…この町は退屈しないわね…」

少女はやれやれといった感じで不良共に顔を向ける。

「お嬢ちゃん、俺達とイイコトしない？」

テンプレ中のテンプレである。そう1人の不良が言ったすぐ後、

「な、なんだてめえ！ やめっ、うわあああああ！！」

不良グループの端にいた1人が、勢いよく橋の下へと飛んで行った。それなりに橋は高い気がしたが、まあ、死にはしないだろう。

と、放り投げた本人、上下ジャージ姿の岩見祥吾は安易に考えていた。

すると、その場にいた少女を含めた人間全員が祥吾の方を向く。

「てめえ！ よくもタクを！この人数を相手に勝てるとも思っているのか！？」

少女に声をかけたリーダーらしい不良が声を張り上げる。弱い人間ほど喚き散らす（わめきちらす）とは本当のようである。

「勝てないと思ってたら手はださねえよ。馬鹿か teme は？」

今の言葉でキレたのか、不良リーダーが正面から殴りかかってきた。

その馬鹿正直な拳を祥吾は右手ではたき落とし、左手で鼻を中心に殴った。その衝撃で不良リーダーは面白いくらいに吹き飛ぶ。いつも思うが、全くどうも頭の軽い奴を殴ると、気持ちいいくらいに飛ぶな。

そして、リーダーが吹き飛ばされたのを見るや否や、ひい！と豚のような悲鳴を上げながら、下の連中が逃げ出そうとする。

だが、祥吾がそれを許すはずもなく、1人残らず逃げ惑う不良達の襟首を掴み、勢いに任せて橋の下に向けて投げる。

不良全員を橋の下に投げ落としたところで、今まで黙っていた少女が呆れと驚きが混じった声で話しかけてきた。

「はあ…別にアンタが助けなくてもあんな連中、あたし一人で片付けられたのに」

「確か電撃系最強のレベル5だろう？自分の能力がどれだけ周りに被害を及ぼすか分かって言ってるのか？」

ぐ、と少女は息を詰まらせた。それもそのはず、少女はこれまでも幾度となくその電撃使い（エレクトニクマスター）としての力を行使し、先程のような身の程をわきまえない連中を倒してきた。

しかし、その大きすぎる力は周辺地域への影響も大きい。それは主に停電などの被害だ。例えば、信号機が停止すれば交通事故が起こりやすくなる。

特にこの暑い時期。冷蔵庫が動かなくなれば、それは中身、入っていた食べ物の全滅を意味する。エアコンの冷房が入らなくなれば、寝苦しいことこの上ない。

そんな惨事を引き起こしているの、毎度注意を風紀委員などから言われているらしい。そのくせあまり反省してないと見える。

「う、うっさいわね！ わかってるわよ…」

どうやら完全に凶星だったらしい。目線を右下辺りにそらし、少し頬を赤くしている。

「じゃあな。能力使うのもほどほどにしろよー」

祥吾は少女に、背中を向け、左手をズボンのポケットに突っ込み、右手を振りながら去っていった。

1人残された少女。

「何なのよ、もう…」

口をへの字に曲げて、悔し涙を少しだけ浮かべる。

自宅に帰った祥吾は、よし、と両手のグーにして達成感を得ていた。

「あの子には期待してもいいな。」

その期待が勘違いでない事を祈るばかりだ。

その翌日。昨日祥吾が目付けた少女、序列第3位のレベル5で常盤台のエース、「御坂美琴」は、後輩かつルームメイトであり親友でもあるレベル4テレポーターの風紀委員「白井黒子」に誘われて、とあるファミレスに来ていた。

なんでも、黒子は御坂に紹介したい友人がいるという。

「私のファン？」

ジャッジメント

「ええ。風紀委員の第177支部で、わたくしのバックアップを担当してくれている子ですの。一度でいいからお姉様にお会いしたいと事あるごとに」

「はあ…そうなの…」

「お姉様が常日頃から、ファンの子達の無礼な振る舞いに頭を悩ませているのは存じてますわ。けれど、初春は分別をわきまえた大人しい子。それに何より私が認めた数少ない友人。ここは黒子に免じて——あ、もちろん、お姉様のストレスを最小限に抑えるべく、」
そう言いながら、鞆から手帳らしきものを取り出した黒子。

「今日の予定はわたくしがばっちり——あ、ちょ！」

その「予定」とやらが、気になったのか、黒子から手帳を取り上げる御坂。

「ま、待つてくださいお姉様！ あがつ！」

手帳を取り戻そうと席を立ち上がるとする黒子。しかし、その行動は虚しく終わる。御坂は黒子の顔を右手で押さえつけ、左手に手帳を持ちながら「予定」を音読する。

「えーっと、なにになに…？ 初春を口実にしたお姉様とのデートプラン、その1『ファミレスで親睦を深める』、その2『ランジェリーショップで勝負下着を購入』、その3『アロマショップでシヨッピング（媚薬購入）』、その4『初春駆除』、その5『お姉様とホテルへGO』…」

御坂は目をつもり、息を整えながら言う。

「つまり、大人しくて分別ある友人を利用して、自分の変態願望をかなえようと…これを読んでるだけで…」

「あの…えと…その…」

右手で押さえられていて、表情の大半が分からないが、少なくとも口が上に引きつっている。冷や汗もかいているようだ。

すると、御坂は黒子から手を離し、静かに立ち上がる。

「すんごくストレス溜まるんだけどお！」

「ほ、ほへえひやま、ほあえいあつへえ！」

勢いよく黒子の両頬をつねりだした。ちなみに今の黒子セリフを訳すと、「お、お姉様、おやめになつてえ！」である。

2、3秒のくらくらした後、黒子から手を離し、席に座りながら、ため息交じりにこういった。

「まあ、でも」

「ん？」

黒子はつねられた頬を手でさすりながら、御坂を見る。

「黒子の友達じゃあ、しょうがないか」

「お、お姉様ああああああ！！！！！！」

「なっ!？」

黒子は感謝感激といった調子で飛び上がり、御坂に抱きつく。

「お姉様がそんなにも黒子の事を思ってくださっていたんなんで!」

周りの目を気にせず自らの愛情表現をする黒子。

その刹那。

「やかましい!」

その店内に凜と響き渡る声と共に、黒子に声の主からの鉄拳制裁が下される。

「あいだっ!？」

床に倒れ、うおおお・・・!と痛みに悶絶する黒子。

一体誰がこの愛すべきバカにお仕置きしたのか。驚いて後ろを振り返る。

「あ! アンタは昨日の!」

「ん? ああ!」

お互いの顔を指差しながら、驚く二人。

黒子の頭を容赦なく殴ったこの男、ジャージ姿の岩見祥吾である。今日はバナナチョコレートパフェでも食べようと、このレストランによつていた。もちろんイライラを解消するためである。しかし、先程黒子の愚行で、またちよつとイライラついたようではあるが、騒ぎの張本人である黒子を殴った事と御坂に会ったおかげで、そのイライラも無くなつた模様。

「あいたたた・・・その殿方はお姉様のお知り合いですの?」

多少痛みがひいたらしい黒子が御坂に質問する。

「ええ。昨日不良達から私を守ってくれたのよ。ほら、橋の下に落ちてた連中。あんたも知ってるんじゃないの?」

「ああ、あの暴漢達は貴方が追っ払ってくれたんですね。それについてはお礼を申し上げますけど・・・いきなり女性に手を上げるなんてひどいことなさるんですね」

黒子はまだ痛いらしい頭を押さえて、祥吾を睨む。

「何言ってるのよ黒子。こんな場所であんな行動に出るあんたの方が悪いわよ」

「それは確かにそうでございますけど・・・」

それでもまだ黒子は納得いかない。という顔をしていた。

「それじゃあ、痛い思いをさせちゃったお詫びに何か奢ろう（おごろう）か？」

優しい。何故か美少女には優しい狂気の殺人鬼・岩見祥吾。

「いえ、流石にそれはなりませんわ。元々悪いのは私ですし」

いくらなんでも悪いと思ったのか、黒子は祥吾の提案に賛同しなかった。

「じゃあ、また縁があったら会おう。愛情表現もほどほどにしろよ」
右手の親指を立て、ニコツと笑う。いわゆるサムズアップと言われるやつだ。

そして別れのあいさつもそこそこに祥吾はファミレスを出ていく。

「悪い人ではなさそうですわね」

「そうね」

友人手帳に名前があっても恥ずかしくないタイプの人だ、そう思った瞬間、

あ。と、御坂は口元を押さえる。

「またあの人の名前聞くの忘れちゃった・・・」

「全く仕方ありませんわね。まあ、今度会う時にちゃんと聞く用にいたしましょ」

そろそろ時間に初春との待ち合わせ時間になりますわ。黒子はそ

ういい、ファミレスを後にする。

「というわけで、ご紹介しますわ」

黒子達はファミレスを出た後、待ち合わせ場所である公園に向かった。

どうやら、先に来ていたようで、白井さん、と初春は元気よく手を振った。

一緒にいる長髪の子は誰だろう、黒子はそう一瞬思ったが、制服も同じだったことから初春の友達だろうと推測する。

そして今、互いの自己紹介という流れである。

「こちら、柵川中学一年、初春飾利さんですの」

「は、初めまして初春飾利…です」

緊張しているらしく、頬を赤くし、語尾が小さくなる。

「それからー」

黒子の言葉を遮り、長髪の少女が口を開ける。まあ、元々黒子も少女のことは知らないし、紹介のしようもないが。

「どうもー、初春のクラスメイトで、佐天涙子です。何だか知らないけど、ついてきちゃいましたー。ちなみに能力値はレベル0です」

何だか投げやりで、皮肉っぽい自己紹介である。

「わああ！ さ、佐天さん何をー！」

佐天が随分な自己紹介をしたので、慌てる初春。

「初春さんに、佐天さん」

御坂が2人の名前を復唱する。

名前を呼ばれたので、御坂の方を向く佐天と初春。

そして呼んだ2人の目をしっかりと見て自分の紹介をする。

「私は御坂美琴。よろしく」

「あ……よろしく……」

「お願いします……」

佐天と初春は御坂の態度が思っていたのとは違つたらしく、少し硬直する。

「では、つつがなく紹介も済んだところで、多少予定がくるってしまいました。今日の予定はこの黒子がバッチリと——」

ゴツン、また黒子の頭部に衝撃が走る。先程祥吾に殴られていたので、余計痛い。

うぐぐ……。思わずうずくまる黒子。祥吾よりかはマシだったようだが、それでも痛いものは痛い。

「全くもう……。ま、こんなとこにいるのも何だし、ゲーセンいこっか」

にこりと笑う御坂。佐天と初春はまさかお嬢様からゲーセンなどと言つ言葉が出るとは思いもしなかったので、え……と、呻きを漏らす。

「ゲーセン……ですか？」

佐天はそう聞き、初春と顔を見合わせる。

「ええ。さ、黒子もそんな所でうずくまってないで行くよ」

「もう、お姉様ったら。ゲームとか立ち読みではなく、もうちよつとお茶とか、お琴とか、ご婦人に相応しいご趣味をお持ちになれませんか?」

黒子が御坂のあまりのサブカルチャーっぷりに文句を言う。

「うっさいわね。大体お茶やお琴のどこが私らしいって言うのよ」

ティッシュやらチラシやらを受け取りながら、御坂は答える。

「なんかさ…全然お嬢様じゃ無くない？」

「上から目線でもないですね」

佐天は自分の考えていた御坂像と違うなあ、そう思いつつ、初春が先程受け取ったチラシを覗き込む。

「ん？ 何それ？」

「新しいクレープ屋さんみたいですよ。今なら先着100名様にゲコ太マスロットプレゼントって」

「何そのやつすいキャラ！ 今時そんなのに食いつく人なんて…あたっ」

佐天はそう言いながら歩いていたら、チラシを凝視して立ち止まっていた御坂とぶつかる。

「御坂さん？」

「どうなさいましたのお姉様？」

黒子と初春がどうしたのかと、問いかける。

「あら、もしかしてお姉様。クレープ屋さんにご興味が？ それとも、もれなくもらえるプレゼントの方ですか？」

黒子は御坂にジト目で問いかける。それは明らかに確信している目だった。

「な、何言ってるのよ！ 私は別にゲコ太なんか…！」

慌てて否定する御坂。動揺しているのがバレバレである。

「だ、だってカエルよ？ 両生類よ？ どこの世界にこんなものもらって喜ぶ女の子が…」

御坂は必死に弁明するがその矢先、

あ。と声を漏らす御坂以外の三人。その視線の先を辿ってみると手にしている鞆からゲコ太らしいカエルのストラップが飛び出していた。

赤面する御坂。

口を手で押さえ、声を殺して笑う黒子。

どう反応していいものか分からずに苦笑する佐天と初春。

そんなこんなで、クレープ店がある公園に4人は着いた。

「うお、すっごい人…」

「なんでこんなにちっちゃい子が…」

佐天と初春が、あまりの多さに驚く。

どうやら、「学園都市バスツアー」の休憩と被ってしまったようだ。

「タイミングが悪かったみたいですわ」

「先にベンチを確保してまいりますわ」

すでに大半のベンチは埋まっていると思うが。

「じゃあ、私も。佐天さん、私達の間もお願いしますね。」

「お金は後でお支払いしますわー」

「え、ちょ…!？」

そういつて、初春と黒子は佐天と御坂を残して、座る場所を探しに行った。

「ん？」

「え？なに？」

佐天は列に並んでから御坂がえらく不機嫌な顔をしているので、気にしているようだ。

腕を組み、落ち着きがない。

「あの…順番変わります?」

「べ、別に順番なんて…! 私はクレープさえ買えばそれでいいのよ!」

佐天が聞くと御坂は、先程と同じくすぐに否定する。どうみても早く買いたいと急いでいる顔だ。

「——円になります。ありがとうございます」

「はい、どういたしまして——あれ?」

「あ」

今、クレープを買った男。選んだのはバナナ味。もちろん祥吾である。

「縁がよほどあるのか、すぐに会えたね」

「そ、そうね…驚きだわ…」

お互いに驚きの表情を浮かべる祥吾と御坂。佐天は状況がうまくつかめず、首をかしげている。

「あ、あの、御坂さんのお知り合いですか?」

なぜだろう。ものすごくデジャヴを感じる。

「ええ。そのことは、黒子達の所へ戻ってからするわ」

はい、と返答を返す佐天。

「もしかして、ゲコ太を貰いに?」

2人に質問する祥吾。

「あ、いえ、私は別に…」

手を胸のあたりで振り、否定する佐天。どうやら本当のようだ。

「ち、違うわよ!? 私も別にクレープを食べれば…!」

嘘をついているのがバレバレだと思う。

「どっちにしても、ゲコ太ストラップ、君あたりでなくなるんじゃないかな?」

そう言いながら、佐天を指差す祥吾。

「えっ…！」

「なっ！　そ、そんなことはないわよっ…多分…」

「はは、僕の予想が外れていることを祈るよ」

苦笑する佐天と祥吾。ますます顔をしかめている御坂。

「お待たせしました。はい、どうぞ。最後の一個ですよ」

「どうも…え？　最後？」

本当に祥吾の言う通り、佐天で終わってしまったゲコ太ストラップ。

ドサ。背後で何かが崩れる音がする。

御坂だ。まさに、orzの形で落ち込んでいる。

「うっ…ゲコ太…」

「はあ、全くしょうがないな。ほら、僕のアゲるから、元気出して
そう自分のゲコ太を御坂に差し出す祥吾。

「え！　いいの！？　本当に！？　いいの！？」

ガバッ、と起き上がった御坂は差し出したゲコ太もろとも、祥吾
の手を両手で握る。

「ほ、本当だよ。こんな所で嘘は言わないよ」

ちよっぴり照れながら、返事をする殺人鬼・祥吾。

誰得な構図だよ。どこからか、そう聞こえた気がしたが気にしない。
い。

「ありがとう…！」

嬉しさのあまり、より強く握る御坂。正直に言って少し痛い。

「ど、どういたしまして…」

表面上は笑顔で平常を装っているが、この男、今にも倒れそうな

くらい、頬の温度が急上昇中である。

「ふっふっふん」

「あ、お姉様お戻りに——って、そちらの方は！」
祥吾、佐天、御坂の三人は黒子達が待つベンチを向かって歩いて
いた。

この人ごみでよく見つけ出せたな、と、心の中で感心する祥吾。

「さつき、クレープ屋でばったり会ってね」

と、先程の出来事を説明する御坂。

「ホント、よほど妙な『縁』があるようですわね……」

「はは、僕もそう思うよ……」

は、と感心の声を出す黒子。それに返すかのように頬を人差し
指でかきながら、苦笑する祥吾。

「ところで、お姉様。その殿方のお名前はお聞きになって？」

「あ……ごめん、また忘れてた」

えへへ、そう笑ってごまかす御坂。

「はあ……本当にお姉様ったら……」

あきれ顔でため息をつく黒子。

「というわけで、あなたはなんて言う名前なの？」

今までの失敗を忘れるかのように祥吾に尋ねる御坂。

「お姉様……名前を聞く時は、こちらから名乗るのが礼儀かと思いま
すわ……」

「あ！ え、ええ！ そうね！」

黒子に指摘され、慌てる御坂。

「私は常盤台中学2年、御坂美琴。よろしく！」

ニコツと笑いながら、自己紹介をする御坂。

「同じく、常盤台１年で、お姉様のルームメイトであり、ジャッジメント風紀委員の白井黒子ですわ。以後お見知りおきを」
少しジト目で自分の事を説明する黒子。

「白井さんのバックアップをしている柵川中学１年の、初春飾利です。よろしくお願いします」

丁寧にお辞儀をする初春。

「初春のクラスメイトの佐天涙子です。先程はどうもありがとうございました」

初春と同じく、お辞儀をする佐天。

「僕は浅倉威。あさくあたいし今後ともヨロシク！」

ニカツとサムズアップをする祥吾。なぜ偽名を使ったのか。それは本名をそのまま使うのは流石にまずいと思ったし、同名同姓の別人だと説明して彼女達が納得しても、殺人鬼の名前を呼び続けるのは精神的に疲れるのではないか。そう思った祥吾は自分と性格が似ていて、幼いかったあの頃、子供心を釘付けにされた仮面ライダーの変身者である「浅倉威」の名を借りることにしたのだ。返す気ないけど。

「浅倉さん…ですか。それで、学校はどこに通っておられるのです？」
黒子は祥吾が自分達と同じ学生だと思っただけ、どこの生徒なのかと聞いてきた。

「え？学校？」

「あなただけ、まだ学校を名乗っていませんわ。それでどこの学校のです？」

黒子はもう一度質問する。怒っているようで、先程よりも口調が少しきつい。

「僕これでも三十路近いんだけど…」
と言いながら、ジャージに付いているポケットから、自分の自動

車免許証を取り出す。

「え、そんなはずは…」

疑り深い目で、免許証を覗き込む黒子。途端に目を丸くする。

「ほ、本当だったんですのね…」

え！？、と他の三人も免許証を見る。そして顔を見上げると全員心底驚いた顔でこちらを見る。

『生年月日19××年11月27日』

そう免許証には、記してあった。ここで少し説明するが、祥吾は殺人犯として警察に追われる前に一応免許は取得していた。本来なら氏名の欄に「岩見祥吾」と書かれているはずなのだが、別人として生活することもあるだろうと、一般生活に必要な情報は全て「浅倉威」としてあらかた塗り替えておいてあったのだ。

「それにしても27歳とは…てつきり高2、3年だとばかり思っていましたわ…」

「私、一回り以上も年上の相手にタメ口で話しちゃった…」

あわあわと、混乱する黒子と御坂。

「私もてつきり高校生ぐらいの方かと…」

「私もです…」

ごめんなさい！と勢いよく頭を下げ、謝罪する初春と佐天。

「あ、ああ。いいよ、いいよ！ 気にしないで！ よく間違えられるし、たまに学生料金とかになつてお得だし！ 好きな風に接してくれていいから！」

4人につられて慌てふためく祥吾。しつこいようだが、これでも全国指名手配犯の殺人鬼である。

「それにしても、本当にお若く見えますわ…」

「本当です…一体何をしていらっしゃるんですか？」

初春の敬語がより丁寧になった気がする。

「いや、特に変わったことはしてないかな…?」

そうなのだ。祥吾は警察に追われ始める前後から、容姿がほぼ変わっていない。いや、もつと具体的に言えば老けていないと言った方が正しいかもしれない。これについて祥吾は不思議に思っていたが、特になんてことはないと感じていなかった。

「世の中には不思議なことがいっぱいあるんですねー」

佐天はさらに大きく目を開いて驚いている。

「ま、まあ、この話題はもうやめて、クレープ食べよ?」

若干女の子みたいな口調になっていないか、祥吾。

「そ、そうね…そういうえば、浅倉さんってバナナ好きなんですか?」
御坂が祥吾に賛同して、話題を変える。急に敬語になったので、ある意味気持ち悪い。

「バナナにストレスを少なくしてくれる成分が入っているそうだからね。だから、よく食べるようにしてるんだ。」

そうバナナ味のクレープを口に頬張りながら答える祥吾。

「ふむ…でしたら、この『ムサシノ牛乳』と一緒に召し上がられてはいかがですか?」

黒子が自分の鞆から『ムサシノ牛乳』なる物を取り出してきた。

「アンタそういうの飲むタイプだったけ?」

「失礼ですわね。私だって牛乳くらい飲みますわ。ジャッジメント風紀委員をして
いるせいか、それなりにストレスもありますのよ?」

と言いながら、ゴクゴクとムサシノ牛乳を飲む黒子。

ムサシノ牛乳を飲む理由は他にある気がしたが、祥吾は考えないことにする。他人にどんな目的があろうと自分を不快にさせるものでなければ別にどうでもいい。邪魔だと思っなら、その都度切り捨

てればいいだけだ。

「そういうアンタが、一番あたしにストレス与えてるようにしか思えないんだけど」

ゴホゴホむせる黒子。それを初春が「大丈夫ですか、白井さん」と背中をさする。

「あ、御坂さん。さっき聞き逃しましたけど、浅倉さんとはどんな関係なんですか？」

佐天は怒涛の展開により、忘れかけていた先程の疑問を口にする。「ああ、それわね……」

御坂が昨日の橋の上での出来事とファミレスでの件を佐天と初春に説明する。

「へえ、そんなことがあったんですかー」

「だから白井さん、あの時頭をさすってたんですね」

2人が祥吾と御坂の関係について納得する。

「ええ。もう本当に割れるんじゃないかと思いましたわ……」

「それに関しては本当にごめんね！」

祥吾が黒子に対して謝罪を入れる。

「いえ……元々わたくしが悪いのですし、浅倉さんがそこまで謝る必要はありませんわ……」

しかし本当に躊躇いがない一撃でしたわー、黒子はそう言いながら、痛みが戻ってきたらしいのか、頭をさすりだす。

「いやあ、どうも風紀を乱す輩には、この手で喝入れないと気が済まない性格だね。それを抑える為にバナナ食べまくってるんだけど……効果はあまり期待できない出来ないね」

祥吾はその言葉を言った後、また一口パクリ、とクレープを食べる。

「風紀を正すための風紀委員長ジャッジメントが、逆に風紀を乱して一般人に制裁を

加えられるなんて。皆に示しがつかないわね」

御坂がそう言った後、初春が「あはは…」と苦笑する。

「何も言えませんか…」

はあー、ため息をつきながら、黒子がうなだれる。

「浅倉さんはどんなお仕事を？」

初春がこれ以上、黒子を攻め続けるのは可哀想と思ったのか、話題を変える。

「コンビニのアルバイトとかだね。何か僕にも出来る事はあるかなと思って、自分の可能性を信じてこの学園都市に来たけどさっぱりだよ」

世の中うまくはいかないもんだね、祥吾は肩をすくませながら言う。

（自分の可能性・・・か）

4人の中に1人、その言葉により共感する者がいた。

佐天である。

彼女も自分に何か超能力が眠っているのではないかと胸に期待を膨らませてこの学園都市に来たが、結果は「レベル0」。無能力者の烙印を押され、少しナーバスになっていた。

でも、ここに年齢が一回りも違うが、自分と似た境遇の祥吾に親近感を覚えた。

仲良くなれると思う。もしかしたら、悩みや相談事を打ち明けるほどの人になるかも。初春や御坂さん、白井さんに対してとはまた違った感情。なんだろう？よくわからない。

今まで、佐天は弟がいる事も関係してか、男は自分より子供っぽい生き物だと思っていたが、祥吾に出会ってから少しその考えを改めようと思う。

「そんなご性分なら警備員になることをお勧めしますわ。なんでも

アンチスキル

最近は連続無差別殺人犯、通称死神とも言われる極めて凶悪な人物「岩見祥吾」が頻繁にこの学園都市内に出没していて、コンビ二強盗や警備員アンチスキルの数人の殺害などの事件を起こしていますの。だから、学園都市は臨時の警備員アンチスキルを募集し、早急にこの事態を治めようと必死ですわ」

「ごめん。その殺人鬼、実は俺なんだ。心の中で黒子に謝罪する祥吾。」

「そんな状況ですので、臨時警備員アンチスキルの中で十分な成果を残した者は必須項目である、「4ヶ月の研修」を免除し、すぐ正式に採用するらしいですわ。これはチャンスですわよ、浅倉さん」

牛乳を飲み終えた黒子が、そうアドバイスしてくる。

「そうですよ！ 浅倉さんならきつと立派な警備員アンチスキルになれると思います！」

佐天は声を張り上げて、黒子の言葉に賛成する。

「あら。随分と浅倉さんにご熱心ですね？」

「ニヤリ。と佐天を見る黒子。」

「あ！ や、やだなあ！ 白井さん！ そんなんじゃないですよ！」

（この反応。やはり脈アリ、ですわね）

流石黒子。人を見る目は確かなようだ。

「うっ・・・」

佐天は恥ずかしさのあまり顔を両手で隠す。うん。可愛い。

「ありがとう。佐天さん。帰ったらすぐに必要な物を整理して明日志願するよ」

「ニカッ。祥吾は満面の笑顔で礼を言う。」

「い、いえ！ そんな！ お礼なんて...！」

頬を赤くし、目を細めながら照れる佐天。うん、やっぱり可愛い。

（でも警備員か。面倒だな。）

佐天達には、ああ言ったものの、祥吾は警備員になる気はあまり
アンチスキル
 なかった。

確かに凶悪な殺人犯である自分が、秩序を正す組織で活躍するのは面白いと思う。

採用に必要だと思われる書類は全て偽造し、所持している。だが、それが絶対にバレないという確証はない。

言ってしまった手前、どうしたら良いものかと祥吾が思い悩んでいたその矢先、初春が、

「あそこの銀行なんですけど、なんで昼間から防犯シャッターを下ろしているんでしょうか？」

と言うので全員がシャッターの方へと顔を向ける。
その刹那。

ドオオオオオオオオオオ！！！！

耳の鼓膜が破れるそんな程の轟音とともに、シャッターが無残にも吹き飛ぶ。周辺の人々の表情は、驚愕と緊張に包まれたものになる。

「な、なんなの!？」

「初春！
警備員への連絡と怪我人の有無の確認、急いでくださいな！」

黒子は残っていたクレープを全て口に押し込み、爆発現場へと急
 行する。

「はい！」

「黒子！」

「いけませんわ、お姉様。学園都市の治安維持はわたくし達風紀委員のお仕事。お行儀良くしててくださいな」

事件解決に乗り出そうと御坂を静止する黒子。そしてそれと同じくして、初春が警備員アンチスキルへ現状報告をしていた。

「はい、そうです。第七学区駅前公園前、強盗事件発生。警備員アンチスキルの出動を要請します」

爆発の数秒後、犯人らしき連中が三人ほど出てきた。全員ハンカチからしきもので口を覆っていた。

「おい、グズグズすんな！ サツサとしねえと——」

「お待ちなさい。」

逃げようとする犯人達を黒子が呼び止める。

「風紀委員ジャッジメントですの。あなた方を器物破損、及び強盗の現行犯で拘束します」

その証である腕章を見せつけて、そう宣言する。

顔を見合わせる犯人達。そしていきなり笑いだした。どうやら頭がおかしいらしい。

「何だよこのガキ！」

「風紀委員も人手不足か！？」

「なあ、お嬢ちゃん。とつとどつかへ行かねえと、怪我しちゃうぜ！」

腹が出ている犯人の1人が阿呆みたいに黒子に真正面から突撃する。もちろんそれをヒラリとかわす黒子。

「そういう三下の台詞は……」

相手の勢いを利用し、相手を地面に転がす黒子。

「死亡フラグですわよ？」

まさにその通り。けど、そいつの場合は「脂肪フラグ」と言った方が正しいのかもしれない。

「な！？」

「てめえ……！」

うるたえる残りの犯人達。素晴らしいくらいの王道展開である。

「すごい…」

「さすが黒子」

「よく訓練されているな…」

公園から事態の様子を覗っていた、佐天、御坂、祥吾がそれぞれ感想を述べる。

「ジャッジメント風紀委員の4ヶ月研修…伊達に受けちゃいないってわけね」

「ジャッジメント風紀委員もそこまでやるのか。」

「ええ、そうらしいわ。採用内容はほぼ^{アンチスキル}警備員と同じらしいわよ？」

「ふむ。なるほどね。」

祥吾と御坂はこんな時に何を話しているのか。いや、これが強者の余裕と言っやつなのであろう。むしろ、そうでも言わなきゃやってられない。

「ダメですって！ 今、広場から出たら！」

後ろから初春がバスツアーのバスガイドさんと何かもめている。一体何事だろうか？

「でも！」

「どうしたの？」

御坂が疑問に思い尋ねる。祥吾と佐天もそちらを向く。

「それが…！」

「男の子が一人足りないんです！」

「え！？」

もしかや先程の爆発で吹き飛ばされ、どこかで気を失っているのだろうか？そんな考えを思い浮かべる祥吾。

「少し前にバスに忘れ物したって行っただけ！」

驚く三人。

「じゃあ、私と初春さんで——」

「私も行きます！」

「僕も行くぞ！」

少し御坂は驚いたがすぐに顔を見合わせ、頷く4人。
「分かった手分けして探しましょ」

一方その頃、黒子と犯人達は。

「今更後悔してもおせえぞ……」

そう言いながら、黒髪の犯人は手から火球を出現させる。

バイロキネシス
（発火能力……？）

黒子は超能力カテゴリーから、この男の能力をバイロキネシス——
発火能力——火
や炎を生み出し操作する能力だと判別。

「大人しく消し炭なりやがれ！」

黒髪の犯人は黒子に向かつて、火球を投げつける。だが、火球が
当たる直前で黒子が消え、犯人の頭上へテレポート転移してドロップキックを
見舞い、地面に顔面からぶつけた。

その直後、太股に忍ばせた鉄矢をテレポート転移させて、相手の衣服と地面
に刺し止める。

「て、テレポーター空間移動能力者！？」

「これ以上抵抗するなら、次は鉄矢を体内に直接テレポート転移させますわよ
？」

「くっ……！」

また1人黒子に屈した愚者が増えた。

「そっちは！？」

「ダメです！　いません！」

「こっちもだ！」

黒子が犯人達相手に善戦する頃、三坂達は戻ってこない男の子の
搜索にてんでこ舞いだった。

「どこいったのよ、もう！」

御坂が見つからないイライラを吐き出すかのように愚痴を漏らす。

「あ！ てめ！ こっちに来い！」

「あ、おにいちゃんだあれ？」

「いいから来いって！早く！」

犯人が男の子を人質に取るべく、無理矢理連れて行くこととする。

「あ……！」

佐天は気づいたようだが、他の者は気づいていない。

（私だって……！）

男の子を犯人から守ろうと、佐天は全力で走る。

「やっぱり広場の方をもう一度捜しましょ」

そう御坂が提案しかけたその時、

「うわ！ なんだてめ！ 離せよ！」

「ん？」

「へ？」

「どうした！？」

皆の視線が集まった先には、犯人から男の子を引き離そうとして
いる佐天の姿があった。

「佐天さん！」

目視するや否や、祥吾が佐天の方へと向かって走り出す。

「だめえ！」

佐天が必死に抵抗する。

「このっ……！ ガキっ！」

するとあるうかことか犯人が佐天に向けて、ナイフを刺そうとし
ているではないか！

（クソッ！ 間に合え！）

祥吾は全速力で佐天を守ろうと走る。

そして、

グサ。

「ぐう…！」

祥吾は何とか自分を盾にすることで佐天を守ることには成功したが、腹部を刺されてしまった。

「浅倉さん！」

佐天が悲鳴のような声を上げる。

「大丈夫… 掠り傷だ…」

へへ、と祥吾は佐天の方を向き、平気な顔をする。

「チィ！」

人質は無理だと判断した犯人はすぐに背を向けて全力で銀行前に停めてあった逃走用の車に乗り込む。

（あいつ、後で殺す。）

心の中で固く誓う祥吾。

「浅倉さん！」

「黒子！」

祥吾に向かおうとする、黒子を御坂が怒鳴るような声で止める。

「ここからは私の個人的なケンカだから、悪いけど、手…出させてもらうわよ」

「あ…仕方ありませんわね…」

黒子は諦めたかのように呟く。

「お、思いだした…風紀委員^{ジャッジメント}には身も心も再起不能にする最悪の空^{レポーター}間移動能力者がいて…」

「誰のことですか、それ？」

本当に体内に転移させましようかしら？そう思いながらも現状を見守る黒子。

「チクショウ…なんでこうなっちゃったんだ!？」

車にエンジンをかけた犯人が、すぐさま逃走しようとする。しかし、その前に立ちふさがる御坂。

「さらにその空間移動能力者の身も心も虜にする、最強の電撃使い（エレクトロマスター）が…！」

「そう。あの方こそが、学園都市230万人の頂点。7人のレベル5の第3位、」

そこまで言った瞬間、御坂が超電磁砲コイソを犯人の車に向けて放ち、その衝撃で車を横転させる。

「超電磁砲レベルガン。御坂美琴お姉様。最強無敵の電撃姫ですよ。」

「す…」

「すごい…」

初春と佐天が初めてみた超電磁砲レベルガンに驚きの声をあげる。

（あの程度なら大した障害にはなりそうもないな。十分避けられる速度だ。）

ただ1人、どうということはないとでも言いたげな表情をしている者がいた事は誰も気がつかなかった。

アンチスキル

警備員も到着し、現在は事件の報告と犯人の輸送を行おうとしている最中だった。

「一般の方の負傷者は1名。死亡者は0です。それと…」

「さ、さっさと歩いてください…！」

おどおどしながら犯人達を輸送車に乗せる眼鏡をかけた女性の隊員。あんなのでやっていけるのだろうか？

「あなたの能力もなかなかのモノでしたわよ。レベル3…と言ったところかしら？ 能力に有頂天になるあまり、道をたがえたようですわね。しばらく自分を見つめ直して、もう一度で直してください

な」

「ぐ……」

悔し涙で顔をゆがませる発火能力の犯人。そんなことより、

バイロキネシス

「本当にありがとうございました！」

男の子の母親らしい人物とバスガイドの女性が、体を張ってまで守った佐天と祥吾に礼を述べていた。

「ほら、あなたも……」

母親が自分の息子にも、礼を言うように促す。

「おねえちゃんとおにいちゃんありがとう！」

「えへへ。どういたしまして！」

「ああ。また巻き込まれないように気を付けろよ！」

二ツ、つとサムズアップをする祥吾。若干、癖になっていないか？

「お手柄だったね。佐天さん、祥吾さん。すごくカッコよかったよ」

アンチスキル

「さすがは警備員を目指そうとするだけありますわ」

「佐天さん！ 祥吾さん！ お怪我は大丈夫ですか！？」

事件報告を終えて、戻ってきたらしい黒子と初春。

「平気、平気」

「ああ。僕も全くもって大丈夫だ。問題ない」

「でもお腹を刺されたんじゃない……」

心配そうな顔で見つめる初春。

「本当に大丈夫だって。ほら、刺された後わかるかな？」

と言ってジャージをめくり、腹を見せる。

「わあ……すごい腹筋……」

「見事に割れていますわね……」

「最近はさつきみたいに物騒だからね。こう見えても鍛えてるんだ」

アッハッハと笑う一同。

そして事件も無事解決。

するはずだった。

ボト。

何かが地面に落ちる音…。その瞬間、

「きゃあああああ！！！」

アンチスキル

警備員の女性隊員の悲鳴が響き渡る。

「今度は何だ！？」

全員叫び声のする方向へと顔を向ける。

するとそこには、誰も予想しなかった惨状があった。

犯人の一人である腹出た男の顔の上半分が「無」く、体は地面に倒れ伏していた。

よくみると、倒れた男の奥の、建物の壁に何かが深く刺さっていた。

そしてその刺さっていたものとは・・・

『西洋刀』

そう、犯人の顔半分を切り落とし、周囲を騒然とさせた代物とは、死神・岩見祥吾がいつも所持している西洋刀だったのだ。

そんな馬鹿な。なぜ自分の刀があそこにあるのだ。

慌てて背負っていたショルダーバッグに手を伸ばし、西洋刀の有無を確認する。

西洋刀はあった。じゃあ、今あそこに刺さっている物は何だ？よく似た全く別のものだというのだろうか。

祥吾のそんな考えを無視し、さらに事態は驚くべき方向へと進んでいく。

辺りの人間はほぼ全員、刀が刺さっていた建物とは反対側の建物、さらにその屋上に立っている人物に目を向けている。

その人物とは、

シンプルな形の般若の仮面、きっちりとした黒色のビジネススーツ。

屋上には全国指名手配中であり、連続無差別殺人犯・通称死神「岩見祥吾」が腕を組んで立っていたのだった……！

第1話「電撃使い（エレクトロマスター）」（後書き）

なぜ御坂達と「浅倉威」として一緒にいる祥吾が、屋上に立っているのでしょうか。

その理由は次回明かされます

第2話「異世界樹（ユグドラシル）」（前書き）

今回は、想像屋さんの書いている「とある正極^{プラス}の異世界樹^{ユグドラシル}」の主人公とそのヒロイン、影虎と椿が登場します。

第2話「異世界樹（ユゲドラシル）」

どういうことだ。なぜ自分があそこにいる。

いや、正確には自分と同じ姿をしたヤツがいる、と言った方が正しいだろう。

実際あいつの顔は仮面に隠れて見えないし、祥吾がいつも所持している死神三点セット——般若の仮面、西洋刀、ビジネススーツを便宜上こう呼ばせてもらう——は世界に自分1人しか持っていないという確証もない。

でもそいつは、ほぼ祥吾と同じ姿をしているが、ひとつだけ違う所があった。

背中からばやけて見えにくいが正体不明の「何か」が生えていたのだ。

その「何か」は翼のようにも、羽根のようにも、触手のようにも見えた。本当に形容しがたく、説明しにくい形状だと思う。

まずは数、左右に3本ずつ。

次に色、右側は赤く、左側は青い。

最後に形。これが一番説明しにくい。

右側は先端が鎌のようになっていて、左側はなんだろう？ ばいきんまんの尻尾と言えばまだわかるだろうか？

そんな祥吾の思考を無視し、事態は関係なく進行している。

先程の一連で黒子と御坂の噂を丁寧の説明してくれた犯人の1人がガタガタと震えながらまた説明し始めた。

「ま、まさか…まさかあいつが一週間前から学園都市のニュースに毎日出ていた、今まで老若男女問わず千にも上る人間を殺してきた…全国指名手配の無差別連続殺人鬼…死神・岩見祥吾だって言うのか…!？」

その説明が終わると辺りの緊張がより一層高まった。

「ご名答。せめてもの情けとして、苦しまないように殺してやる」
ビルの屋上から一瞬で説明してくれた犯人の目の前まで来るとそう宣言した。

いやいや肯定するなよ。少なくとも子供は殺してねえよ。

祥吾は心の中で突っ込みをする。

あの偽物を即座に殺したかったが、このままあいつに騒ぎを起こさせていれば、自分が本物だと疑われる可能性はないのでは？と結論付ける。

でもやっぱり今後ろにいる佐天達を危ない目にあわせないという保証はないので、草の根を分けてでも必ず殺してやる、そう自分に誓う祥吾。

ひい。

そのたった一言の悲鳴さえ、言わせる暇もなく偽物は犯人達の頭を拳で粉碎する。

飛び散る脳みそと血液と骨と肉片。なんともグロテスクである。
小さい子供が見たらまず間違いないトラウマものである。幸いにもさっきの男の子は母親が顔を覆い隠しているので、大丈夫だと思
うが…。

ちなみに西洋刀が飛んできてからここまで10秒も経っていない。
今まで現状を把握できなかった御坂が、はっと思いだしたかのよ
うに体をビクツと動かし偽者に向けて超電磁砲レールガンを放った。
しかし、

「ああ？」

偽物はおそらく最大出力で撃ってきたら超電磁砲レールガンを右手の甲で、空へ弾き飛ばした。

もちろん驚愕の表情を浮かべる御坂。

そりゃあ、誰だって自分の力が通用しない。いや、自分の常識が通用しない相手は怖い。

御坂はそういう経験があまりないのか、2、3歩後ずさりをしたようにも見えた。

しかし今はそんな事はどうでもいい。あの偽物をどうやって処理するか。それが問題だ。

「ふん。所詮学園都市序列第3位のレベル5、超電磁砲レールガンとはいえこの程度か」

はつきり言って期待外れだ、とでも言わんばかりに肩をすくませ、ため息をする偽物。

確かに弱いとは思ってたけど、面と向かって言ってやるなよ。祥吾は呆れた様子で偽物を見る。

「岩見祥吾！ 貴様を連続殺人犯として逮捕する！」

いつの間にか、取り囲まれていた偽物。だが、そんな事は気にも留めず、祥吾達の方を向いてにやりと笑うと、祥吾がいつもやっている通りに包囲網の一部を殺して、逃走する。

そして逃げて行った偽物を追跡する警備員。アンチスキル

現場には無残にも殺された犯人と警備員、それと祥吾達五人が残っていた。

長い沈黙の後、初春が最初に口を開く。

「い、一体何だったんでしょ…？」

「あ…あれが、岩見祥吾…千人も殺した殺人鬼…」

ぶるぶるといまだに震えが止まらない佐天と初春。

「私の超電磁砲が…手で弾かれた…？」

自分の体を小刻みに震わせ、自分の常識外の出来事を頭の中で整理しようとするが、処理が追いついていないようだ。当然と言えば当然だが。

「……………」

黒子なんか偽物の姿を目視した瞬間からピクリとも動かない。相当重症なご様子。

「黒子…黒子！」

御坂が元に戻り、全く動かなくなつた親友の名前を連呼する。

「お、お姉様…なんでございますの…？」

はっ、として自分が呼ばれていたことに気がつく黒子。

「アンタ大丈夫？」

心配そうな目で黒子を見つめる御坂。

「だ、大丈夫…と言いたいところでございますけど…流石に無理そうですわ…申し訳ありませんが、お姉様。先に寮に戻っていますわ…」

心底疲れたような顔で言う黒子。

「初春…悪いのですけど、報告…お願いいたしますわ…」

「あ、はい。わかりました…」

トボトボと駅へ向かう黒子。かなり危険そう不安なのだが。

黒子が先に帰った後、残り全員、初春と一緒に風紀委員177支部の建物へ向かい、報告へ済ませた帰り道。さっきの出来事を振り

ジャッジメント

返る。

「ホント、大変なことが起っちゃったね」

「ええ。まさかあんな奴が来るとはね…」

親指の爪を噛みながら、御坂は答える。さっき喪失感はどこへやら。今は悔しさが彼女の心を支配しているようだ。

「あんなに躊躇なく人が殺せるなんて…本当に怖いです…」

「……………」

初春の方は多少回復したのだが、佐天はまだ震えている。

そつと肩に手を置く祥吾。

「佐天さん大丈夫？」

「あ、はい！ 大丈夫です！」

佐天は、ひゃつ、と飛び上がり照れた様子で答える。

（どうやら、佐天さんは浅倉さんがいれば大丈夫なようね）

（はい、あんなに嬉しそうで恥ずかしそうな佐天さんを見るのは私も初めてです）

祥吾と佐天に聞こえないように御坂が初春に耳打ちする。

「じゃ、私はこっちだから。」

別れ道。祥吾は初春の報告が済んだ後、まだ近くに「奴」がいるかもしれないので、皆を寮まで送るといふ約束をした。

御坂のみ、別の寮なのでここで別れなければならない。

「はい、三坂さんもお気を付けて」

「私を誰だと思ってるのよ。さっきは弾かれちゃったけど、序列第3位の超電磁砲^{レールガン}、御坂美琴よ？」

冗談めかした口調で言う。

まったねー！と、御坂が自分の寮へと向かって歩いていく。

「浅倉さん、寮まで送っていただきありがとうございました」

初春がお辞儀をしながら、祥吾に礼を言う。

「ぽあ……」

佐天は頬を両手で押さえ、赤面し、目がとろけている。完全に恋する乙女のそれである。

「もう、佐天さんたら。」

あはは、と苦笑する祥吾。

「じゃ、ちよつとの間、アンチスキル警備員関連で会えなくなると思うけど元気でね」

手を振り、帰ろうとする祥吾。

「佐天さん、浅倉さんが行っちゃいますよ？」

「えっ、ああ！ うん！」

自分の世界から帰ってきた佐天が慌てて祥吾にさよならをいう。それに対して、祥吾はまたもや、ニカッ！と今まで以上の笑みを浮かべ、サムズアップをする。もはや完全に自分のものになっている祥吾であった。

その帰り道。

銀行強盗事件後に現れた正体不明の偽物は何だったのか。

あいつが逃げる前、確実に目が合った。少なくとも奴は自分と何か関わりがある、と祥吾は推測する。

なんとなく、奴の背中についていた羽——いや触手か？——

あの正体不明の「何か」を見た時、初めてじゃない感じがした。どこことなく20年前の少女と同じような？

なににせよ、あの偽物を捕まえて話を聞くことができれば何か分

かるかもしれない。

そう思い祥吾は人気がない路地裏に入りササッと、死神の姿に替える。

これでよし。

路地裏から近くの建物の屋上へとよじ登り、周囲を見渡す。特に何もおかしいところなかった。ならば、別の所へと場所を移す。その捜し方を4回ほど繰り返した時、だんだんイライラが募ってきた。

「クソッ…何で見つからねえんだよ」

そうばやきながら、しばらく周囲を見回していると一組みのカッブルを発見する。

妬み妬み妬み妬み嫉妬嫉妬嫉妬殺す殺す殺す殺す殺害殺害殺害殺害。

溢れる負の感情を全力で押さえつつ、これは丁度いい憂さ晴らしになる。そう思った祥吾はすぐにカッブルに向けて手作りの手榴弾を数個投げつける。そして、命中したのか耳をつんざく轟音をだして爆発する。

うん。いつも通り上手く調査出来ている。あの威力だと乗用車1台は軽くスクラップにできそうだ。

はたから聞いたら爆弾魔としか思えないことを思いつつ、カッブルの生死確認向かう。

さてさて、どんなグチャグチャな顔面になっているか。

祥吾は歪んだ快楽を楽しみながら、煙が晴れるのを待つ。
だが。

ヒュン！

「む？」

煙の中から飛んできた槍のような物を難なくかわし、手榴弾を投げた場所をジッと見つめる。

しばらくすると爆煙が薄れてきて中から先程のカップルが鬼の形相でこちらを睨んでくる。まあ、ほぼ意味なく殺そうとしたのだから当然と言えば当然なのだが。

「てめえ…俺だけならまだともかく、椿まで——」

彼氏らしい男が祥吾を威嚇する。

「おお、怖い怖い。」

男の言葉を遮り、祥吾が挑発する。

「……」

男は黙ったが依然、殺意を込めた恐ろしい瞳をこちらに向けたまままだ。

（あの野郎どうやって噛み殺そうか——そうだ。物忘れ辞典を使って奴の戦闘技術を忘れさせた後、顔の原型をなくした後で、空高く投げて大砲を錬成して夜空のチリに変えてやろう）

男は物忘れ辞典と呼ばれる能力を祥吾に使おうとした。だが、

その瞬間祥吾はいきなり男の視界から消えた。

（どこだ！？）

慌てて祥吾の姿を探す男。その刹那、

「最近のガキは食ってるもんが良いのか、発育がいいな」

男のすぐ後ろにいた椿と呼ばれた女のたわわに実った二つの膨らみを両手で驚掴みにする祥吾。お前そんなキヤラだったっけ？

「~~~~~!!!!!!」

いきなり胸を掴まれて、椿と呼ばれた女は赤面する。当たり前だ

が。

「全くうらやま——」

祥吾は何か言おうとしたが、すぐに振り返った男はその行為を確認するや否や、思いきり祥吾の頬を殴る。

勢いよく殴られた祥吾は数十メートル、凄まじいスピードでゴロゴロと転がされ、最終的にビルにぶつかり、止まる。もちろんその衝撃でビルは崩壊。不用意に他人の女に手を出した仮面の男は瓦礫の下敷きになった。

ガラ…。

瓦礫を押し分け、頭から、腕から、口から、血を流しながらも立ち上がる祥吾。

普通の人間ならまず間違いなく死んでいた。

「アア… いったえ… 簡単に死ななそうだからもう少しからかってやろうと思ってたが… やめた」

そして獲物を見つけた狼の如くギラギラした目つきでこう言った。

「もう殺す」

「影虎！！ こいつを今まで生きてきたことを後悔するぐらい残酷に殺してくれ！！！」

椿は先程握られた胸を片手で押えながら、自分も恨みを晴らすと手から炎を出し、反撃の準備をする。

「ああ… 極めて了解… ついさっきから俺もそうしようと思っていたところだ…」

人を睨み殺せるのではないか。そう錯覚してしまうほどの恐ろしい眼つきで祥吾を見る影虎と呼ばれた男。

「俺はてめえを喰い殺す！！」

影虎はそう宣言し、両腕に物体を斬る鈍器を錬成する。その怒鳴

り声に対して祥吾はこう返す。

「口がなければ食い殺すことはできんぞ？ お前の綺麗に整った顔面は最高に、最悪に、破壊する」

祥吾は宣言通り、影虎の顔面の原型を無くすつもりらしく、突き技らしい構えをする。

「いい気になるなよ！！！！」

「死ねやクソガキ！！！！」

この後、両者の激しい戦闘が長く続きどちらが倒れる。

はずだった。

2人が激突するまであと数メートルというところで、それは起こった。

丁度、祥吾と影虎を距離を隔てた間。

空間が裂け、そこから黒くぬらりと光る手が2人を掴もうと伸びてくる。

「なっ！？」

「くっ！！」

この裂け目、一体なんと説明すればいいだろうか。最も似ているといえば、「鋼の錬金術師」の「真理の扉」によく似ていた。

影虎はなんとかすれすれで裂ける事が出来たが、祥吾はかなりスビードを出していた為、避けきることができずに黒い手に掴まれてしまった。

「チィ！ クソ！ 放せ！」

祥吾はなんとか逃れようと力をいれるが、何故か全く振り払う事が出来ない。

そうこうしているうちに、祥吾は割れ目に引きづり込まれ、その割れ目もだんだん小さくなり、やがて完全に消えた。

←祥吾を飲み込んだ謎の何か

> i 2 8 3 7 6 — 3 6 7 1 <

遺された影虎と椿。

「一体何だったんだ・・・？」

割れ目の中を見た時、興奮状態の影虎でも思わずぞっとするようなおぞましい『目』があった。はつきり言ってもう二度とあれは見たくない。

「あの仮面野郎・・・生きてはいないと思うが、今度会ったら絶対に・・・！」

「まあ、その時はその時だ。次に会ったら必ず俺が喰い殺してやるよ。」

そう言って2人は自分の家に帰っていった。

第2話「異世界樹（ユグドラシル）」（後書き）

祥吾は一体どうなってしまったのか？それは次回のお楽しみ。

ちなみに影虎と椿は次回も引き続き登場します。

第3話「正体不明（キメラダークネス）」（前書き）

今回は今までの謎がちょっとだけ解明されたり、されなかったり。

第3話「正体不明（キメラダークネス）」

「ちくしょう・・・やっぱり女は損だ。いつもさっきみたいな目にあっちまう・・・！」

椿は祥吾に自分の活火山を触られたのが、相当ご立腹な様子。当たり前だが。

「まあまあ、落ち着けて。今度あいつにあつたら、この世界でも非情で残酷なやり方で殺してやるよ。それにしても椿。よくあそこまで冷静でいられたな。いつものお前だったら、さっきとは比較にはならないくらいパニックになったと思うんだが・・・どうかしたのか？」

影虎は普段と違うパートナーの行動に疑問を抱く。

「いや、なんというかな・・・俺も驚いているんだ。なんだか、怒りが散っていくような不思議な感覚だった・・・影虎こそ、なんで異世界樹ユグドラシルを使わなかったんだ？」

「俺の方は使わなかったっていうよりも、使えなかった。分かりやすくいうと制限をかけられたような・・・」

影虎は自分の顎に手を当てて考える。なぜ自分が憎むべき相手を圧倒し、蹂躪し、思い通りになすがままにする無敵の力を使用しなかったのか。

「制限？ お前を制限できるような奴がいるのか？」

「わからん・・・ああ、もうあの変態仮面野郎に会ってから調子が狂ってやがる。椿、さっさと帰って寝るぞ」

「ああ、分かった」

2人はお互いの疑問が納得しないまま家路に着く。

だが、その頃には祥吾の事など、ほとんど気にならなくなっていた。またあいつが現れたら、先程のことを聞き出した後、食い殺せ

ばいいだけだ。

「全く祥吾君には手が掛るわねん」

甘ったるくて蠱惑的な、でもそのくせ、母性がちらちら見えるような、明るい声。

先程、祥吾と影虎が激しくぶつかり合おうとした場所からさほど離れていないビルの屋上で少女は言う。その姿はどことなく『魔法少女』を連想させる。

「雷蝶様。本気であの計画に組み込むのが、祥吾殿でよかったのですかいな？ それがしは少し冷静さが足りないと思いますのん」

「蜘蛛。子供つてのはね、ちよつとやんちゃで、世話を焼いちゃうくらいが可愛くていいのよん？ 下手にいい子過ぎたら、それこそ面白味がなくて、育てがいがなくて、つまらないじゃない？」

蜘蛛 と呼ばれた奇妙な男。全身をきつちりとした体にフィットした黒衣で覆っており、顔もどう考えても目も口も鼻も露出していないマスクで覆っている。そのマスクには蜘蛛の八つ目に見える赤い宝石が光っており、背中からは何の意味があるのかこれも蜘蛛の八つ目に見える飾りが伸びている。

「はー、そんなもんですかいなあ。子供はおるか、嫁さえいないそれがしにはわかりませんな！」

そんな怪人蜘蛛男としか表現できない奇妙な人物は、ケラケラと身体を揺らして笑う。背中に付けている足の飾りも一緒になって揺れるので、気持ちが悪い。

「しっかしホント、あの場で雷蝶様が、『ミッシングパワー密度集散』を使わなければ、レコードブラッド新書血録は暴走。祥吾殿はおるか、周囲数百メートルは危うか

つたですなあ」

「でも、そうならない為にあなたに監視をさせてるんじゃないのん」
雷蝶と呼ばれた女は持つていた『魔法少女のステッキ』で、蜘蛛の頭をコンコンと叩く。

「それもそうですね！ ではこれからそれがしは、引き続き祥吾殿の監視をいたします」

それだけ言うと 蜘蛛 は、音も立てず建物の屋根やら、屋上やらを渡つて、祥吾の住処である第10区のアパートへと向かった。

それを静かに見送る雷蝶。そして自分も目的の為に動き出す。

「アレイスター。あなたがどんなに強く願おうとも、どれほどの科学技術を生み出そうとも、どれだけの軍事力を持つとうとも——」
少女は「窓のないビル」を見据えて言葉を続ける。

「——人間じゃ、夢と希望の魔法少女には勝てないのよん？」

癖のない虹色の髪。額には触角が、背には羽ばたく蝶の羽が。瞳に映るのは単純な思い。唇から漏れるのは糖分過多な艶やかな声で、平塚雷蝶はそれだけ言うと、霧になって消えた。

辺りには静けさと蜘蛛の糸と蝶の燐分が残っていた・・・。

←平塚雷蝶

> i 2 8 3 7 3 — 3 6 7 1 <

← 蜘蛛

> i 2 8 3 7 4 — 3 6 7 1 <

空間が割れ、その裂け目から落ちて来る人影。
「あだっ!？」

真理の扉（仮名）に飲まれてすぐ、祥吾はさっきの場所とは違う所にいた。立ち上がり、周囲の建物から考えてここは自分のアパートの前だと理解する。

何だっただんだあれは？ドラえもののどこでもドアか？

まあ、あの穴の原理など今はどうでもいい。

そんなことよりも、今は身体の傷を癒す方が先決だ。優先事項だ。こんな血みどろの格好では、佐天達に会えるわけがない。

さっさと治して、あの偽物を殺さなくては。少なくともそれだけで、彼女達の安全につながるはずだ。はっ。全く狂気の殺人鬼が女の子の心配だと？バナナ菓子の甘さが移ったか？自分に成分表示があるなら、糖分とかが書かれていてもおかしくないな。

そう思い、自分の部屋のドアノブに手をかける。すると、

——テレビのニュースが聞こえた。

はて。妙だな。出かける時、冷蔵庫以外の電源は切っていったはず。だから、女子アナの声などが聞こえるわけがない。しかも、よくよく耳を澄ませてみると何やら、バリバリ何かを食べているような音もする。

確実に誰がいる。

そう思った祥吾は西洋刀を手に持ち、いつでも斬り殺せるように準備し、ドアをそつと開く。足音を立てず、ゆっくりと居間に近づく祥吾。そして到着し、様子を覗く。

なんだあれは？

そこには1人の少女が寝転びながらテレビニュースを見ていた。周囲に散乱するのは食べかけのお菓子と、食べ終わったお菓子の包み。適当に食い散らかされたそれら塵屑ごみくずの中心に、足を投げ出し視線をテレビに固定して、ただ何かのように存在していた。ちなみに少女が食べているのは祥吾がコンビ二から盗ってきたバナナ菓子だ。

しかし、その少女人間と呼ぶには、無理がある正体不明な風貌だった。

黒のショートボブで右の後ろ髪だけが外に跳ねた左右非対称の髪型をしている。服装は黒地のワンピース。

そこまではいい。別段おかしいものではないし、普通だと思う。祥吾にとっても嫌いな部類ではなく、むしろ好きなカテゴリーだろう。

だが、問題はその背中に生えている物。

赤い鎌のような三枚の右翼と、青いグネグネとした矢印状の左翼が三枚生えている。

そう。昼間、銀行強盗共を殺害し、御坂の超電磁砲レールガンを手で弾き、警備員の包囲網をいとも簡単に脱出し、佐天達を恐怖に陥れた人物。祥吾の偽物が生やしていたものと同じものが、少女からも生えていたのだ。無関係ではあるまい。だが、あいにくと祥吾には、女の子を殺す趣味はないので、少し驚かしてから聞き出すことにした。

一閃。

西洋刀から繰り出されるその斬撃は、少女のアホ毛を、見ていた

テレビを、その奥の壁を切断した。

ビクッ！と身体を震わせる少女。

そしてゆっくり、こちらを振り返る。それは心底驚いたようなそんな顔。

少女と目があつた。その瞬間また斬撃を放つ祥吾。脅しとはいえ容赦がない。

「きゃあ！」

両手で頭を覆い隠す少女。

これ以上やると悲鳴しか言わなくなりそうだったので、一旦納刀して休憩。恐る恐るこちらを向く少女。そして立ち上がり、何かを喋ろうとする。

その時、ちょっと驚かすつもりで、冗談半分に西洋刀を掴む。

「ひい！」

脅かした本人も驚くぐらい勢いよく後ろに後ずさりし、壁にもたれながらへたり込む。その刹那、彼女の絶対領域を突破して「何かが見えた。

黒。

いやいや、今はそんな事はどうだっていいんだ。問題はそれを履いてる本人だ。

「お願いだから斬らないでえっ！！」

流石にここまで来ると可哀想にもなってくる。でも、強盗犯と警備員を惨殺した本人じゃないという可能性も否定できないので、刀を抜きながらいい放つ。

「では正直に答えるんだぞ。昼間、第七学区駅前の公園前で、銀行強盗犯を握り潰したのはお前か？ああ、もちろん誤魔化したり嘘をついたりしていると俺が判断した場合、お前は種族名『バラバラ死

体』に職業変更だ」

ジョブチェンジ

「わかった！！ わかったから刀をしまつてえ！！」

少女はさつきよりも、縮こまり、激しく身体を左右に揺らしながら祥吾に懇願する。

「いや、ダメだ。俺はお前を完全に信用したわけじゃないし、もし昼間の偽物なら下手に西洋刀をしまつたら、そのスキに首根っこを持って行かれるかもしれんからな」

「そ、そんなあ……」

少女は当然涙目である。いや、涙目を通り越して完全に号泣している。もうすでにまぶたが赤く腫れて、眼は充血している。祥吾も心が痛んだが、まだ死ぬわけにはいかない為、心を鬼に、いや、般若か？まあ、そんな事はどっちでもいい。

「ところで、さつきの質問だが、どうなんだ？」

祥吾は刀を少女の首に押しあてながら、昼間のことを聞く。

「う、うん……私だよ……」

少女は刀にビクビクしながら答える。

「そうか。なら次。なんで俺の姿になつていたんだ？」

そこが一番の疑問点。なぜ、どうやって少女は自分の姿をしていたのか。カモフラージュ系超能力の何かだろうか？

「そ、それはね……さ、誘われたの……面白いものがあるって……いい退屈しのぎになるって……」

どこぞの犯罪組織の勧誘か。そう呆れつつ顔には出さずに少女の言葉を聞き続ける。

「そ、それにあなたはあの女の子達に正体を見破られなくなかったって、き、聞いたから、だ、だから私がりすまして、騒ぎを起こしてくれて言われたの……」

話だけを聞くと、この少女は誰かに言われてやった、という感じなのだろう。しかし一体誰に？

「聞いた？言われた？誰にだ」

「や、八雲紫って言う妖怪…」

妖怪？妖怪って言うのはアレか？『ゲゲゲの鬼太郎』とか『地獄先生ぬ〜べ〜』とか『ぬらりひよんの孫』に出てくる人外達のことか？

祥吾は予想だになかった単語が出てきたせいで、より一層少女を疑うようになった。

「妖怪？ この科学技術溢れた現代に？ それが本当だったら、面白いが」

「ほ、本当だよ！ 信じてよ！」

少女は涙を流しながら必死で訴える。

「まさかお前も妖怪なのか？」

「う、うん、私の名前は『封獣ぬえ』…能力は『正体不明を操る程度の能力』…あなたに変身できたのは、この能力を使ったからだよ

…」

「^{ぬえ}鶴。聞いたことがある。確か平安時代ぐらいに、源なんとかに弓矢で討伐された妖怪。その正体は、頭は猿、体は虎、尻尾は蛇という現在で言う合成獣^{キメラ}のような奴だったという。

「で、一体その封獣ぬえが、正体不明を操る程度の能力とやらを使って、どうやって俺に化けていたんだ？」

正体不明を操るとは一体いかなるものなのか。ここ学園都市に来て、一週間。大体の能力は覚えたつもりであった。だが、ぬえという少女がいう不可思議な能力は知らない。

「私の正体不明を操る能力は、いわばハッター系…ていうほどでもないかな最近は。この能力は自分が見たものの姿や能力をそっくりそのまま写す能力。でも、正体を見破られる、つまり今、この私の姿を認知した人には通用しない。だからお兄さんにはもう効かない」

先程よりも幾分落ち着いてきたのか、震えが少なくなってきたぬえ。

「昔も人間に正体を見破られて、私は地底に封印された…」

体操座りをし、悲しそうに俯くぬえ。もしかして伝承に描かれる鵜^{ぬえ}本人だろうか？

「その人間ってのは源なんとかってやつか？」

「うん、源頼光。私はあいつに封印された。1000年以上前にね…」

ぐ、と拳を握りしめるぬえ。よほど悔しかったらしい。そういえば、鵜^{ぬえ}の最後って確か、平安京の帝の屋敷を飛び回っている最中に源頼光の放った弓矢に当たり、地面に落ちたところを数十人で槍突き立てた…だったと思うが、それが本当なら、ひどい話だと思う。どんな悪行を行ったのかは知らないが、小さい女の子にそこまでするのはないと思う。きっと、もし自分がその場にいたら、頼光を始めとする侍を皆殺しにしていただろう。

「最後に1つ聞いておくが、俺と一緒にいた女の子達を危険な目にあわせたなら…どうなるか分かっているだろうな…？」

祥吾は最後とばかりに念を押して確かめる。

「し、しないよ！むしろ、あの子達にあなたのことがばれないように…うまくいくように私はあそこで大暴れしたんだから！」

と必死に訴えるぬえ。

「そうか…じゃあ、もう帰っていいぞ」

祥吾はぬえの首から西洋刀を離し、釈放を宣言する。

「え…？あ…えと…あのね…」

立ち上がったもじもじするぬえ。さっきから思っていた事だが、こうしてみるとやっぱり可愛い。背は御坂と同じか、ちょっと上くらいか。

「なんだ？ まだ何か用があるのか？」

「私…帰り方がわからないんだ…」

「え？」

え、えへへと、笑うぬえ。いや笑ってる場合じゃなくだな。

「帰れないっていうのは一体全体どういう事だ？」

「え、えつとね、私がこつちに来るときに、スキマっていう穴から出てきたんだけど、それを出してくれた人との連絡が取れなくて…だから…その…」

その直後ぬえは、またもや祥吾が思いもしないことを言った。

「帰るまでの間、一緒に住まわせてくれないかな…？」

……。

……。

……さて、どういったリアクションを取ればいいのかろう？
訳が分からないよ。

世の一般男共から見たらこんなに可愛い子が自分から住まわせてくれ、なんて言ったら喜んで承諾するだろう。

だが、ぬえはまがりなりにも妖怪。しかも、代々語り継がれるほどの大妖怪だ。妖怪とは一部の例外なく人間を食らうという。それは物理的に食う場合と、精神的に食う場合の2種類に分けられるらしいが、どっちにしても気持ちのいいものではない。下手に1つ屋根の下で暮らすことになれば、油断した途端、すぐにただの肉塊になるのは目に見えている。

「お願いだよ！ 出来る限りのことはするから！」

祥吾の両肩を掴み、一生懸命に懇願をするぬえ。しかもうるうる

させた上目遣い。少なくとも大抵の男はこれで落ちると思う。

出来る限り。なんと都合のいい言葉だろう。出来る事なら自分が使いたいよ、と、そう思う祥吾であった。

「ほんとにお願い・・・お願いだからあ・・・」

顔をスーツに押しあて、泣きじやくるぬえ。ああ、スーツが汚れていく。これ洗うの面倒なんだよなあ。まあ、元より自分の血で既に汚れているので、気にはならなかったが。

「じゃあ、まず最初に自分が散らかしたものを片付けてくれないか？」

そう言っただけがやったであろう、散乱しているお菓子の食べかすや包みを指差す祥吾。

ばあつと明るくぬえの顔。祥吾も例に洩れず、落とされてしまった。恨めしい。ああ恨めしい、男の性さがという奴が、全くもって恨めしい。

「うん！」

まだ目に涙が残っているが、それすらも可愛さのひとつにするぬえ。なんだろう。こういう子は本能的にそういう落とし方を知っているんだろうか？だとしたら麻薬並みの危険性を誇っていると思う。

「おにいさん、終わったよー！」

元氣よく掃除終了宣言をするぬえ。

「そうか。お疲れ様。じゃあ、あそこに布団しいといたから、寝ていいぞ」

先程しいた一枚の布団指差しながら、祥吾はいう。ちなみに今はスーツを着替えてジャージ姿。でも、般若の仮面は付けっぱなし。

「あれ？一枚だけ？お兄さんはどこで寝るの？」

「この部屋には布団は一枚しかないからな。俺は畳で寝る」

「えー、じゃあ、お兄さんも一緒に寝ようよー」

と片腕を抱きながら、甘えてくるぬえ。そして自分の女性的な部分を当ててくる。でも、体格通り出るところが出ていないので、そこまで嬉しくない。マニアックな奴は嬉しいんだろうけど。

でも、そんな体格に反比例するかのごとく、やたらとませているのは、気のせいだろうか？ いや、千歳以上という年齢を考えれば至極当然か。そのくせ、やたら甘えてくるが。

「ダ・メ・だ。俺はまだお前のことを完全に信用したわけじゃないからな。だから、寝るときはこれをしてもらう…」

ぬえの頭をチョンとこずく祥吾。

「お、お兄さん？ その縄は一体何に使うつもりなのかなー…？」

「こつするのさ！ せりゃあつ！！」

「え、え？ ええっ！？」

目にも止まらぬ早業で、ぬえの両手両足を縛りあげる祥吾。しかもついでとばかりに亀の甲羅に模様に見える縛り方にしてしまった。

「ふえええ…ほどいてよー、おにいさーん…」

「やだねー」

「ううー…」

しくしくとすすり泣きながら、布団に入るぬえ。

←封獣ぬえ

> i 2 8 3 7 5 — 3 6 7 1 <

明日からはいつも以上にぶっ飛んだ毎日になりそうだ。

第3話「正体不明（キメラダークネス）」（後書き）

さてさて、今回はなかなか奇妙な人物達が数人登場しました。だんだん物語の核心に迫っている感じが無きにしも非ずです。

ちなみに次回、影虎と祥吾が再戦するようですよ？

第4話「境界定義（ボーダーライン）」（前書き）

ゲストキャラをヤムチャ化させないように工夫しつつ投稿。

第4話「境界定義（ボーダーライン）」

「ん…もう朝か…」

朝。雀の鳴き声で起きる祥吾。

でもなんだか、体が重い。特に腹のあたりが。

「ん？」

ふと視線を腹部のあたりに向けると、何故かそこにはぬえが寝ていた。しかもヨダレを垂らして。おかげでジャージも汚れてしまった。

「人を枕代わりにするなんて、いい性格してるな…」

ぬえを起こさないように、頭を腹からどけ、近くにあったティッシュで、ヨダレを拭きとる。

——— そういえば、昔も弟が尋常じゃないくらい垂らすもんだから、毎朝拭いてやったっけ。

……………。

家族のことを思い出し、しばし沈黙する祥吾。やがて首を振り、今は今、過去は過去と自分に言い聞かせて、ぬえを布団まで運ぼうとする。

だが昨晚自分で縛った縄が邪魔で思うように運べない。無理に動かせば起こしてしまいそうだったので、西洋刀で斬ることにした。

そして、柔らかい布団に寝かし直すと、ぬえが寝言をいう。

「うーん…おにいさあん…もっと…みてえ…」

ええ？この子、どんな夢見てんのお？

呆れさせるならもつと「もうおなかいっぱい」的なテンプレ系にしてくれよ…と思わざるえない祥吾であった。

変な縛り方をしてしまった影響なのか？そう祥吾が考えている最中チラツと部屋の隅に目をやると、昨日はなかったはずのモノがそこにあった。

近くに行って拾ってみるとそれはバーテンドーが着るような服だった。

なぜこんなものが？しかし、祥吾はどうせ他の着替えもないし丁度いいと考え、ジャージの代わりに着る事にした。

洗面台の鏡で、どんなものかと確認する祥吾。うん。なかなか似合ってるじゃないか。どこの誰かは分からないが、とりあえず感謝する。

さて、今から何をするべきか。

昨日は、自分の偽物を探すことに力を入れていたが、それがぬえだと分かった今、またやることが無くなってしまった。

そういえば、昨日佐天達アンチスギルに警備員の採用試験を受けに行くような感じのことを言っていた気がする。

早速祥吾は、パソコンで手続きに必要なものを調べて、家の中から探し出し、向かおうと玄関のドアに手を掛ける。その時、ぬえのことが脳裏に浮かぶ。

（あいつのご飯どうしょ）

正直な話、昨夜彼女がバナナ菓子を全部平らげてしまったせいで、現在食料は底をついていた。

まあ、正体さえ見破られていなければ、祥吾と同等の戦闘力を持つぬえの事。いざとなれば自分でどこかのコンビニでも襲うだろう。だが、印象からして精神年齢が幼く見えるぬえが、あまりに人間らしくない行動をとらないとも思えない。

祥吾の姿で人外じみた事件を起こしてしまっても、今更どうとも

思わないが、昨日の強盗犯とのやり取りのように、事実を捻じ曲げられて噂が広まっていくのは流石に嫌だ。

ゆえに、祥吾はぬえのご飯になりそうな人間をどこから攫^{さら}ってきて、それを与えようと考えていた。

丁度、扉を開けた途端、そう遠くない位置に肉付きのいい男がトロトロ歩いていたので、狙いを定め、猛スピードで近づき、獲物の水落ちに鉄拳を食い込ませる。

悲鳴すらあげさせず、気絶させる祥吾。

そのまま、引きずりながら自宅へ戻る。

部屋に入った後、ご飯をロープで縛りあげ、風呂場に放置する。なぜかという、ぬえが直接人間を『人肉』として食べるタイプだった場合、食事の際には、大量の出血が予想される。ここならすぐに水で洗い流せるので、後片付けに困らないからだ。

そして、彼女が寝ている近くに置き手紙を残し、出発する。

「ふあゝ…おにいさん…おはよ…あれ？」

祥吾が出かけてしばらくしてからぬえは起きた。

「なんだろ、これ？」

ぬえは祥吾が書いていった置き手紙を手に取り、読む。

『ぬえへ。ご飯は風呂場に縛っておいたから、好きな時に食べてね。祥吾より。』

なんだが、どこことなく優しい母親を連想させるが、書いてある文

章は普通ではない。

「ごはん？」

一体何の事だと思い、指示通りに風呂場へ向かう。

「ああ、なるほど。こういう事ね」

縛られている人間の男を見てぬえは納得する。

（お兄さんもエグイことするねえ。ま、いいや。久しぶりに人間を食べたいと思ってたところだし、丁度よかった。聖も愛を込めて作られた食事は感謝を込めて食べなさいっていつも言ってるし…）
じゅるり…

そう舌舐めずりをした後、右側の血のように紅い鎌状の羽根を一回りほど大きくし、目の前の『ごはん』を食べやすい大きさに切り分けていった…。

「それにしても、まさかまさかの一発合格とはな」

アンチスキル
警備員採用試験の帰り道。

祥吾は、つい先程必須項目「9枚の契約書にサイン」及び「13種類の適正試験」を終え、自宅に帰ろうとしているところであった。試験は思いのほかよく出来ていたらしく、早速明日から勤務することにになった。

（たまには普通の物でも食べてみるか）

そう思った祥吾は近くのコンビニに寄り、弁当や氷菓子などを購入する。幸い所持金は毎日スキルアウト狩りを行っていたおかげで、毎日の食事に困らない程度ぐらいになっていた。

その頃ぬえは。

「お兄さんいないと寂しいし、つまないなあ…」

『ごはん』も食べ終えて、暇を持て余すぬえ。本来ならこのような状態の時はテレビを見て時間を潰すのだが、あいにく祥吾が昨日真つ二つに斬ってしまった為、映らなくなり現在どうやってこの退屈な時間を過ごそうか考え中なのである。

（そういえば、お兄さん、外に出ちゃダメとか言わなかったよね？
ということは、別に外で遊んでも構わないってことだね…）

そう思ったぬえは自分の能力を使って、祥吾の姿に変身し、家の外に出る。

なんでも昨夜見たニュースによると、ここ第10区は学園都市内での治安の悪さは上位に入るらしく、スキルアウトなど性質の悪い連中が頻繁に出没しているらしい。

この連中を殺していれば、ある程度の暇潰しにはなるかもしれない。ゆえに、周囲の建物の屋上から適当な奴がいなか見回す。

（ん？あれは…）

屋上からそう離れていない、裏路地らしい場所で火やら水やら風やらが見える。あと血しぶきも。予想していた通りスキルアウトの連中が喧嘩をしているらしい。

そして、近くに行ってみる。

（誰か立ってる…）

人間達の屍の中心に1人の少年が立っていた。

（あの人が全部やったのかなー？ まあ、いいや。殺しちゃえ！）
そう思い、自身が持っていた西洋刀を回転させながら投げつける。
すると、

「なっ!？」

少年の背中から桜色の翼が生え、自らを斬り裂こうとした物を弾

き飛ばす。

（なんだ？）

少年、もとい影虎は刀が飛んできた方向を見据える。

（あいつ！！あの時、死んだとはあまり思っていなかったが、やはり生きてやがったか！）

そう感じた影虎は、即座に祥吾——に变身している『ぬえ』——
——に向かって、翼を使い突進してくる。

「くっ！」

しまった。こんな強敵ならいきなり投げるんじゃないかった。

ぬえはすぐさま高く飛び、西洋刀を拾おうとする。

だが、影虎がそれを許すはずもなく、自分の上を通りすぎようとジャンプしたぬえを、桜色の翼、^{ユグドラシル}「異世界樹」で叩き落とす。

「ぐはあっ！」

たまらず悲鳴を上げる。それでも、影虎の攻撃は止まらない。地面に転がっているぬえを勢いに任せて蹴り飛ばす。

「がはっ……！」

そして、そのまま建物の壁に叩きつけられ、呻き声を漏らす。

すばやくぬえが体勢を直す前に近づき、ぬえの首を右手で掴み、持ち上げる影虎。その後、あることに気づく。

（こいつの背中に……何かついてる……？）

ぼんやりとはあるが、自分が掴んでいる相手に羽根らしき正体不明の何かが生えている点に疑問を持つ。

（俺の『^{ユグドラシル}異世界樹』みたいなもんか？ まあいい。^{メモリーリセラー}記憶消去で調べれば一発解決だ）

そう思い解析を開始する。

「『封獣ぬえ』……？」

影虎がぬえの正体を調べた結果、自分が掴んでいた仮面男の姿が一旦モザイクが掛かるように変化して、黒髪ショート、黒ミニスカ、黒ニーソの少女の容姿になった。

（なんだこいつ——妖怪！？）

少女の正体が見つかった途端、影虎は怪訝な顔をする。もちろん、この化け物じみた少年、桜小路影虎も日常生活で生きて行く程度の一般常識くらいは知っていたので、まさか幻想の中でしか生息を許されていないはずの人外が現実には存在するとは思ひもなかったのである。

だがしかし、それ以上の事は分からなかった。そう。まるで、何かに遮られているような？

「ぐ…バレちゃった仕方ない！」

ぬえは自身の鎌状の赤い羽根と槍のような青い羽根を一回り以上大きくすると、影虎に向けて振り下ろすが、虚しく『異世界樹』^{ユグドラシル}の翼に抑えつけられてしまう。

「化け物の処分は化け物がしなくちゃいけないよなあ…？」

影虎はぬえを押さえていない左手で、全てを貫く銃を錬成すると、それを突き刺そうと一度手を引く。

その刹那。

「ッ！？」

影虎は前触れもなく飛んできた謎の長いものに右腕を切断されよるめき、ぬえから2、3歩離れる。間髪入れずに、黒い人影がぬえと影虎の間に割り込み、飛び込んできた拳。

三発連続だった。

一撃目は影虎の腹にめりこみ、うずくまったその顎に二撃目。駄

目押しのようにならへ最後の一撃が入った。

歯が折れた。血の味を感じながら横向きに倒れ込む。

軽い脳震盪^{のうしんどう}をでよるける影虎に禍々しいほど黒い人影は次の攻撃に移る。

どこから出したか、人影は拳銃を構える。だが、それは一般的な拳銃とはかけ離れた大きさだった。

グリップから銃口までの長さが40センチに迫り、重量が2キログラムを超える、拳銃としては常軌を逸した巨大な代物だ。弾丸も巨大な為、銃の見かけに反して玉は5発までしか装填できない。

スミス&ウエッソン^{モデル} M500。500S & Wマグナム弾という専用の弾丸を用いる、世界最強の拳銃の引鉄を、人影は片手で構えたまま平然と引いた。

銃声が裏路地に轟き、瞬間、銃口から炎がほとばしった。銃を握っている腕の筋肉が張り詰める。世界最強のリボルバーを片手で操るというだけでも、ありえないほどの離れ業だが、銃の反動を完全に抑え込んで連射した。

5発全てを影虎に命中させ、体に大穴をあける。

本来この銃は狩猟用で、人間に使ったならこの程度では済まないのだが、『異世界樹^{ユグドラシル}』の驚異的な自然治癒能力なども合わさってか、激痛こそするものの死にはしなかった。

そしてすぐ、拳銃を無造作に投げ捨て、服のポケットから手榴弾を2個取り出し、歯で安全ピンを抜いた後、弾丸の衝撃を吸収しきれなかったらしく、倒れかけている影虎に向かって投げつける。

轟音。

そして、半径数メートルを吹き飛ばす爆発。

もしも、影虎がごくごく普通の人間だったならば、今ので死体すらも残らなかっただろう。

だが、

「てめえ…いいのくれじゃねえか…椿にてめえを食い殺すところを見せてやりたかったんだが…無理みたいだな…今すぐじゃねえと俺の気が治まらねえ…！」

影虎は天使のような王冠とさらに大きくなった『異世界樹^{ユグドツシル}』の翼を伴って何事も無かったかのように立ちすくんでいた。

「チツ…今ので死なないとは根っからの化け物らしいな、お前は…」
「お兄さん！」

ぬえは自分を助けてくれた人間の事を呼んだ。

その人物は、シンプルな形の般若の仮面、きつちりとした黒のビジネススーツ。

今まで千にものぼる生き物達を殺し、自分が不快になる物は全て叩き潰してきた人外、死神・岩見祥吾であった。

「ぬえ、大丈夫か？」

「うーん、お腹が痛くて大丈夫じゃないかも…」

ぬえは先程、影虎に蹴り上げられた部分をさすって答える。

「そうか、じゃあ、お前は先に家に帰っている。こいつは俺がケリをつける」

「でも、お兄さんこそ大丈夫なの？ あいつかなり強いよ」
心配そうに祥吾を見上げるぬえ。

「大丈夫だ。いざとなったら閃光弾でも、煙玉でも使って逃げるさ。あ、それと、『ごはん』うまかったみたいだな」

「うん、おいしかったよ」

こんな時に何故そんな事を言うのだという目で問いかけるぬえ。

「おお、よかった。なら、晩飯はこいつを土産に持って帰ろう」

祥吾は余裕綽々（よゆうしゃくしゃく）といった感じで冗談めかしたように言う。

「何をごちゃごちゃ言っただ！！」

といいながら、ものすごい勢いで祥吾達に近づいてくる影虎。

「死に損ないが！！ 化け物は化け物らしく、とっとくたばるがいい！！」

近くに刺さっていた西洋刀を手に掴み、迎えつ祥吾。

「お兄さん絶対生きて帰って来て、一緒に晩御飯食べようね！」
そういつて勢いよく飛び立つぬえ。

正体不明な彼女を尻目に祥吾は、いつも通りの台詞を言う。

「お前みたいなのを見るとイライラするんだよ…！」

首を回しながら西洋刀で、殴りかかろうとした影虎を弾き飛ばして相手との距離をとる。

そして、刺突の構えをすると、

「お前の顔を破壊する…！！」

それに対して影虎も、

「はっ！なら、テメエよりも早く食い殺せばいいだけだ…！！」

両者、地面を蹴り上げ、相打つ。

第4話「境界定義（ボーダーライン）」（後書き）

次は一真と葵が出演しますー

第5話「感染捕縛（キャプチャーウエブ）」（前書き）

皆さん長らくお待ちしました。第5話投稿完了です。

第5話「感染捕縛（キャプチャーウェブ）」

「あ…またか…」

桜小路椿は思う。なんでこの子、天野葵はここまで料理が出来ないんだろう、と。

いくらなんでも、卵焼きの練習をするのに193個も割る必要がどこにあるというのだろうか。物資が比較的容易く手に入る現代でも限度というものがある。

火をつければ高確率で爆発を引き起こし、無事に完成したと思ったら、見た目も味も最底辺レベル——もやは兵器と言っても差し支えない——ものになるし、こいつもしかして新手の超能力にでも目覚めたか？と疑いたくなる。

だが、今更こんな事を愚痴っけていても仕方がない。椿は葵の「料理の特訓をしてほしい」という頼みを引き受けてしまったのだ。若干後悔しているが。

そして、現在。葵の恋人、負導 一真の自宅のキッチンで修業しているというわけである。

もちろん、椿と一真が料理をしても爆発なんて起きるわけがないし、味もごくごく普通のものが作れた。なので、コンロがおかしいとか、素材が腐っている、というわけではないのだ。

異常な不器用具合と速度で卵を浪費する葵。

そのせいもあり、あんなにたくさんあったストックもほぼ無くなりかけてしまっていた。だから嫌がる影虎にしぶしぶ買いに行かせたのだが、なにやら帰りが遅い。まあ、どうせあいつのことだ。また途中でスキルアウトの連中でも狩っているのだろう。何も心配することはない。後で、遅くなった理由を尋ねて『お仕置き』をすればいいだけだ。

そんな事を考えている椿に葵がかなり申し訳なさそうにいう。

「ごめんね、椿……」

少しだけ涙目になっている葵。でもそんな彼女に椿は苦笑しながら、

「いや、大丈夫だ。気にするな」

失敗した卵をリビングでテレビニュースを見ている一真に向けて、

「おい、一真。追加だ」

「もう無理なんですけど……」

先程からこの少年はできそこないの卵焼きばかりを食わされている。ついさっきまでは影虎も一緒になって食べていたのだが、あるうことかあの男は椿に卵を買ってこいと頼まれ、外に出ていつてしまった。

帰ってきたらどうしてくれよう、と思っている一真の目に、いつもの人殺しの名前がテレビに映し出される。

『——全国指名手配犯の連続無差別殺人鬼、通称・死神、岩見祥吾は昨日午後4時23分頃、第7学区公園前に現れ、三人の銀行強盗犯、かけつけた警備員アンチスキルの数人を殺害し、逃走しました。付近の住民は注意してください。次のニュースです——』

「うわゝ、おつかねえな。葵も気を付けろよ」

「大丈夫よ。その時は一真が守ってくれるんでしょ？」

葵はなんてことはない、という顔で答える。

「いや、影虎ならともかく、俺には無理だ」

わりと本気らしい顔で一真も返事をする。

「えゝ？ 頑張つてよゝ」

「無茶言つなよ……」

そんな感じのじゃれあいをしている2人をよそに、画面に映って

いる男の顔——というより仮面を見た椿が、ハツとした顔で口を開く。

「こいつ…昨日の…」

「ん？どうしたの椿？」

「昨日の夜に影虎と歩いていたら、こいつと出くわした」

「！！」

そして椿は昨晚の出来事を一真達に話した。

「ひえゝ、いきなり手榴弾を投げてきて…」

「突然現れた空間の裂け目に飲まれて消えていったと…」

葵達は驚きを隠せないでいる。最後の方に関しては若干疑いの気があるかもしれない。

「ああ、そうだ…あいつ…今度会ったら中から灰にしてやる…！」

祥吾にされたことを思い出して、怒りを露わにする椿。あのう、家が燃えそうなので、手から火を出さないでくれませんか椿さん。

と、若干顔が引きつる一真。

「でも、そういう事なら今後は安心だな。」

冷酷非情な殺人犯にこの先出会わないと思い、安堵の表情を浮かべる一真。

「だといいんだが…」

だがそれはとは対照的に椿は不安な顔をしていた。

「シャア！」

「死ねやあ！」

影虎に向かって祥吾が突進してくる。それに備えて影虎は『当た

つたものを動けなくする壁』を目の前に錬成する。

（これであの変態仮面野郎の動きを奪って、異世界樹で刺しまく^{ユグドラシル}り、最後は死世界樹^{キルドラシル}で切り刻んでやる）

「馬鹿が！ そんな壁ひとつを作ったぐらいでこの俺の刺突^{つき}が防げるとでも思っているのか！！」

祥吾は壁の付加効果は露知らず、勢いを落とすどころか、ますます上げて距離を詰める。

（ふん、バカはお前の方だ）

と影虎が心の中でせせら笑いながら、間抜けな敵が畏にかかるのを待つ。

だが、そんな影虎の目論見はあっさりと外れる。

「はあああああああ！！」

「何っ！？」

触れる者全てを例外なく、その動きを止める壁が簡単に崩され、その中から貫通してきた祥吾の西洋刀の剣先が影虎の肩口に侵入する。

あまり気持ちよくはない肉が切り裂かれる感触。それは肩甲骨をも切断し胸の筋肉を縦断、腹の重要な内臓すらも突破して一気に引き抜かれた。螺旋を描いて血飛沫^{ちしぶき}が舞う。

「う——ぐ」

致命傷を食らい——影虎は耐え切れず地面に突っ伏す。

異世界樹^{ユグドラシル}の圧倒的治癒力のおかげで死なないとはいえ、やっぱり痛いものは痛い。

切り裂かれた服と肌。血が滴り落ち、内臓の一部が零^{こぼ}れている。

しかし、そんな事はお構いなしにあれほど深かった傷が、ぶちゅるぶちゅると嫌な音を立てながら、再生を始めている。まあ、この再生力に関しては先程の奇襲で確認済みであるのだが。

見る見るうちに傷は塞がり傷跡も消え、ただ破れた服と血の後だけがそこには残っていた。

「てめえ…いいのくれじゃねえか…」

「チツ、やはりその程度の攻撃では——ん？　ん？」

祥吾が言葉を出しかけたその時、わずかに首を傾げる。そう。急に何かを思い出したような、気付いたかのような——そんなどっちつかずの曖昧な反応。

そして影虎が予想しなかった台詞が彼の口から出てきたのだ。

「桜小路…影虎？」

「な…テメエ何でそれを知っていやがる！？」

影虎は怒鳴りながら祥吾に問う。それもそのはず、この少年は自分の情報をありとあらゆる場所、から文字通り本当に全て消していた。だが、最近では数人ほど彼を知っている者——いや、覚えている者？認識してくれる者？

話がそれた。

そうだった。今はそんな事を考えている場合ない。こんな事は家に帰ってから恋人の椿と一緒にラブコメしながら、じっくりゆっくりしっかり思考すればいい。

とはいえ、いくら自分を知っている人物が少し増えたからと言って、なぜこんな気が触れている殺人鬼が自身の名を口にしたのか。影虎にはまるで分らなかった。

もちろん、今までにもこのような『分からない事』があつた場合、
超能力『メモリーキャンセラー記憶消去』を使い、謎を解明してきたが、今回の結果は『

エラー』。つまり解析不可能というわけである。先程のぬえと同じく、正体不明の何かに遮られて失敗した、という感じなのだ。

そして、また祥吾はそんな影虎の怒号を無視し、予想を超える言葉の数々を口にしたのである。

「レベル6？ メモリーキャンセラー 記憶消去？ ユグドラシル 異世界樹？ 都市伝説『牙桜』？ 何だこりゃ？」

「！？」
なんだこいつ。なんなんだこいつ。容姿と相まって気持ち悪いし、気味も悪い。

最後に祥吾は衝撃の一言。

「本名は……？ イーノ——」

ガッ！と、影虎は驚きのあまり祥吾に我を忘れて掴みかかる。

だが、興奮状態の影虎とは反対に祥吾は、さも鬱陶しそうに、面倒くさそうに、目を細める。

そして次の瞬間。

「ぐふ……！？」

祥吾の後ろから正体不明の何かが影虎を刺し貫いたのである。これにはさつきまで戦いの最中に考え事をしていたらしい祥吾も驚き、後ろを見る。

だが、祥吾の目には自分の後ろから来た正体不明の何かは映らない。

なぜなら。

「おい、てめえの背中に付いているそれは何だ！？」

そもそも『正体不明』の何かは祥吾の背中に付いていた。

影虎の言葉に従い、祥吾も自分の背中を見る。そして、祥吾は自分の背中に付いているモノを見て、何かが分かったかのようにニヤ

りと笑う。

「てめえ!! 気持ち悪い笑いなんてしてねえで、それが何か答えやがれ!!」

「全くぴーぴーギャーギャーやかましいな。」

「てめえ...!!」

誰のせいでこんな事になっているのか。

影虎はもうすでに我慢の限界といった感じであるが、その原因である祥吾はそんな事は気にも止めず、先程影虎に掴まれ、スーツのシワを直していた。

祥吾の背中に付いていたのもの。

それは、左右に3本ずつ生えている、羽根だが、翼だが、触手だが、わからない正体不明の代物だ。色と形は右側が紅い鎌、左側が蒼い槍となっていた。

そう、これはぬえに生えていたものと同じくモノが祥吾にも生えていた。

「この羽根はアレだ。お前が俺と勘違いして、手を上げていた女の子がいるだろ? 全く可愛い女の子に暴力を振るうなんて、お前は一体どういう神経してるんだ?」

それはアイツ(ぬえ)がお前(祥吾)に変身していたからだろうが、と影虎は思う。もっとも影虎の場合は自分の一番大切な存在である椿が傷つけられれば、どんな奴だろうと、手段を問わず報復しようとするので、容姿などの見かけはさほど重要ではない。

そんな腸が煮えくりかえっている影虎の心なんぞ露知らず祥吾は言葉を続ける。

「ぬえは昨日の夜、俺と一緒に寝ただけの仲なんだが...妖怪らしくてな? もしかしたら、あいつの妖力の影響で、妖怪化したのかも

しれん。」

祥吾は顎に手を当てながら、自分の推測を述べる。

「あいつの妖力が強いのか、それとも俺の身体が影響を受けやすかったのかは分らん。だが、今はそんなことはどうだっていい」

「なんだか、吹っ切れたように上を見あげ、すぐ影虎を見直す。」

「お前の顔を破壊する事が出来ればな！」

六本の触手と同時に祥吾は影虎に斬りかかった。

第二ラウンド、開始。

「影虎……？」

葵の料理を見ている途中、椿は何故か急に背筋が凍るような寒気を覚え、恋人の名前を呟いた。

「ん？ 椿ちゃんどうしたの？」

葵は心配になり声を掛ける。

「いや、なんだか、影虎が危ない気がするな……」

「あ、待つて椿ちゃん！」

「悪い！ ちょっと探しに行ってくる！」

椿は葵の静止を振り切り、玄関から出て行った。

「……一真、私達も行くよ！」

「ああ！」

ただ事ではないと思った一真と葵の二人もすぐに後を追いかける。

「いやはや、いけませんなあ。今あのお二人の邪魔をしては」

不意に上から聞こえる男の声。これだけなら、軽薄なナンパ野郎の印象を受けるが、この声には明確な殺気が含まれていた。

「ッ!? 誰だ!」

飛んでくる手裏剣を避け、声の主を探す椿。

「まあまあ、ここは落ち着いて深呼吸——」

男は急上から現れ、椿を落ち着かせようとするが、当人は全く聞く気なしであり、火の玉を投げつける。というより、いきなり手裏剣投げておいて落ちつけはないだろう。

「黙れ! それより私に何の用だ! そこをどけ!」

「いやあ、せっかちなお嬢さんですなあ。それがしとはある方よりあなたを今晚、影虎殿がいる付近に行かせるな、と言われておりますゆえ、ここで足止めさせていただきます。あなたを行かせてしまつたら、それがしが怒られてしまつんですよ」

複眼の飾り。足飾り。奇妙な出で立ちの人物のその人物は——影のように存在感なく椿の正面を陣取っていた。この男、名を蜘蛛ふまじめといい、どこか不真面目な印象を受けるが——先程からピリピリ針のように殺気に向けてくる感覚からいつてかなりの使い手である。まず椿なら負ける事はないだろうが、それでも油断しないにこしたことはない。

椿は両手に炎を灯しながら、蜘蛛に問いかける。

「何だと!? どこかの魔術結社の一味か!」

両手から火炎系魔術を放ちながら、椿は声を張り上げる。

「恐いすなあ! 問答無用で、火あぶりの刑とは!」

熱くなる椿とは対照的に、蜘蛛は飄々と炎をかわし、ケラケラと笑う。

「くっ……貴様……!」

ちよこまか動き回り攻撃を避ける蜘蛛にイライラする椿。

「椿ちゃん!」「椿!」

突然誰かの声が響く。

「ん?」

「ダブルグラビトン
二重重力変化!!」

「ぐっ!?!」

突然増した重力に堪らず地面に膝をつく 蜘蛛。

「大丈夫!?!」

謎の人物達は椿を追いかけてきた葵達であつた。

「お前ら何でここに!?!」

「椿と影虎が心配だからに決まってるだろ!! 今はそれより…」

一真が追ってきた理由を説明し、 蜘蛛 の方を向き、睨む。

「ぐう…重力変化レベル3の『天野葵』殿に、能力解析の『負導
一真』殿ですかあ…二人で、同時攻撃とは中々いい線をいってま
すけど…」

蜘蛛 は重力変化に耐えながら、二人の名前を能力名を言い当
てる。

「何で俺達の名前を!?!」

目の前の怪人蜘蛛男が自分達の名前を知っていた事に驚く一真と
葵。

「所詮その程度でしたな」

あっけらかんとした口調で2人への感想を述べる 蜘蛛。

その瞬間、糸が切れたように仰向けに倒れる葵。顔が赤く、呼吸
も荒い。

「葵!?!ぐ…!」

葵に驚いて抱きかかえた一真も、意識を失い、葵のそばに倒れ込
む。

「葵! 一真! 貴様一体何をした!?!」

二人とも意識がないようで、顔も赤く、呼吸も荒い。

「いえいえ… ちょっとお二人には邪魔なんで、眠ってもらう事にしたんですよ。ま、死ぬほど苦しいでしょうけどね」

二人の意識が無くなったことで、重力変化グラビトンの効果が消えた 蜘蛛は立ち上がり、地面に着いたときについてしまった膝の汚れを適当に両手で払い落す。

「それがしにはちょっとした能力がありましてねえ。まあ、あなた方に合わせて言えば、『感染捕縛』キャプチャウェブといったところでしょうかねえ、病気を操るんですよ。主に感染症をね。『博多涼』とかいう毒をただランダムに発生させるだけの雑魚とは違い、それがしのは潜伏期間等を自由に設定できて、感染と同時に高熱・頭痛・吐き気等を戦闘中即座に引き起す…」

蜘蛛 が自分の能力を事細かに説明する。

「なんて事も出来ちゃうんですよねえ！ ああそれがし、自分の能力が恐ろしいですわあ！」

ひゃあひゃあと、笑う 蜘蛛。

「貴様…！」

椿は怒り心頭と言った表情で 蜘蛛 を睨む。

「ウイルスへの抵抗力が高い、新書血録レコードブックのあなたには効果なかったようですけど」

蜘蛛 はただただ淡々とした口調で話す。

「それよりも、早くお二人を病院まで運ばなくてもいいですかねえ？ 今お二人を苦しめている感染症はエボラやペストと同じ感染力・重篤度・危険性が極めて高い、一類感染症に近い状態で設定しておきましたから。早くしないとお2人だけでなく、学園都市全域が大変な事になりますよ？」

しかし、途中で 蜘蛛 は思い出したかのように、言葉を続ける。

「いや、あなたは別に影虎殿だけでいれば他人はどうでもいいんでしたっけな！　それがしとしたことが、とんだ勘違いを！　人質にでもしよう思つとりましたが、詰めを誤ってしまいましたな！」

これは失敬失敬！と、自分の頭をぺちぺちと叩く　蜘蛛。

だが、椿の目が一瞬大きく見開いた。癪に障つたのだろう。だが、すぐに落ち着きのある余裕めいた表情に変わる。

「ふん…本当に詰めを誤つたな」

椿は　蜘蛛　に向かつて、勝ち誇つたような笑みを浮かべる。
「？」

蜘蛛　はどういうことだ？とでも言いたげに首をかしげる。すると椿は二人のそばにより、何かをブツブツ言つた途端、呼吸も荒く、苦しそうだった一真達が、すうすう寝息を立て始めた。

「ほほう、治癒魔術を唱えて、お二人の中にいるウィルスを撲滅するとは…いやはや、お見それしました」

椿の対応に　蜘蛛　は感心する。

「しかし、このままではイタチごっこになりますなあ。それがしがまた、別の感染症へと設定し直して、ばら撒けばいいだけの話だけですから」

蜘蛛　椿の行動が無駄だと言わんばかりに、腕を組み、見下すような態度をとる。

「そうなる前に…」

椿は火球を手のひらに出現させ、それを　蜘蛛　に投げつける。

「おっと！」

おどけたようにかわす　蜘蛛。

「お前を焼けばいいだけだ！！」

ストレートな死刑申告。

「……………」

黒衣の怪人は何の感情も浮かばせない。こちらがこの男の本性なのではないと椿は思う。道化^{どうけ}ている先程までの彼は、あくまで表層の嘘でしかない。

本質は——同じ、自分と同じ、人の道を外れた存在だった。

「威勢がいいのは結構な事ですが——」

笑い、蜘蛛 は気安く両手を広げた。

「いけません、いけませんなあ。それがしに勝てる気でいちゃあ・いやはや、今日に限っては——それがしに勝つことは絶対にできない。そう断言出来てしまふんですなあ。残念な事です。あなたみたいな化け物相手に何の準備もしないわけがないでしょう？」

「どういう意味だ!？」

怒鳴りながら火の玉を絶えず放ってくる椿。

「おつとつと、危ない危ない…確かに椿殿。あなたは身体の再生力、病気への耐性等、肉体面では、ほぼ無敵のようですけど…精神面はどうでしょうかねえ？」

椿の猛攻を避けながら、余裕げに、蜘蛛 は一気に逆転した形勢を楽しむように椿に笑いかけてくる。

「てなわけで出番ですよ。オデッサ殿」

不意に 蜘蛛 は誰かの、否、何かの名を呼んだ。

『やっと呼んでくれたね 蜘蛛 さん！ オデッサⅡエイは頑張るよ！ 雷蝶よりもすごいってこと見せてあげるんだから！』

虚空に響く正体不明な【何か】の声。でも、その声はやけに幼い子供じみていて、口調も喋っている内容もそれに比例しているように思える。

「な、何だこの声は!？」

『だから黒髪のお姉ちゃん！ オデッサⅡエイの為に言う事聞いてよね!』

ぎょっとして、椿は身構えたようだが、瞬間、彼女は身体を硬直

させると甲高い声で叫んだ。

「ぐ——あアやめろ！ 私の中に入ってくるな！」

椿は抵抗したが、やがて座り込んだ。その時、頭にはウサギの耳が、腰には尻尾がついている。

「流石は魔族の現女王。新書血録レコーデブラックの憑依も容易でしたかな？」

蜘蛛が突然『魔族』という単語を口にした。それが何を意味するのか椿には分からなかったが、少なくとも自分に害がある未知の存在だということには気づいていた。そして——これは能力の作用だろうか。何故か、オデッサが取り付いた瞬間、椿にはウサギの耳としっぽが生えた。

『当然だよ！ もつと褒めて褒めて！オデッサⅡエイは褒められると伸びる子なんだよ！ オデッサⅡエイはすごいんだよ！ 強いんだよ！』

とオデッサⅡエイは椿の身体を動かし、どうだといった具合に胸を張る。

「いやあ、お見事！」

蜘蛛が拍手をしながら、近づいてくる。

『へっへーん！ オデッサⅡエイはやればできる子だもん！』

蜘蛛が褒めたせいで、余計にオデッサが自慢げな顔をする。

『で、このお姉ちゃんはどうするの？』

椿の処理に困ったオデッサが 蜘蛛 に問う。

「殺すなど言われておりますゆえ、そのまま憑いってくださいな、オデッサ殿」

オデッサと 蜘蛛 の勝ち誇った笑みが気にさわって今まで、オデッサに精神を抑えられていた椿は低くつぶやいた。

「ふ……さける……な……！」

「『へ？』」

「ふざけるなあああああああ！！！！」

椿がオデッサを自分の身体から弾き飛ばし、その上、巨大な二匹の大蛇を自分の周りに出現させた。もちろん、オデッサが離れたので、ウサ耳も尻尾もなくなった。

「わあ！？」

いきなり抑えつけていた椿が自分を弾き出したため、驚いたオデッサはすつとんきょうな声を上げる。

「おおっと、これは本格的に不味くなりましたねえ…でも、これだけ時間が稼げれば十分でしょう。引きますよ！ オデッサ殿！」

明らかに分が悪いと判断した 蜘蛛 はオデッサと共に逃げるように促す。

「う、うん！」

オデッサも 蜘蛛 の提案に賛同し、逃走を開始する。

「逃がすかあッ！！！」

椿は二人を逃がさないように炎の大蛇を差し向けた。

「あらよつと！」

蜘蛛 は懷から何かを取り出し、椿に向かって投げつけた。

「む！？」

投げつけた物は地面に当たった途端、破裂し、黒い煙を当たりに拡散させる。どうやら、煙玉だったようだ。

「チッ！ どこいった！！」

急いで煙を払いのけ、二人を探す椿。

「見失ったか…仕方がない。今は影虎が無事に帰ってくる事を信じ

て先にこの2人を安全な場所に運ぼう。」
椿はかかりつけの担当医に連絡し、葵と一真の二人を病院に運んだ。

「うおおおおおおお！！！！！！」

「うらあああああああ！！！！！！」

祥吾と影虎の二人はお互いに羽根を生やし、刀剣を持ち、戦っていた。

影虎は異世界樹ユグドラシルの翼で、幾度となく祥吾を串刺しにしようとするが、祥吾の背中から生えている正体不明な六本の触手のせいで、思うように攻撃が出来なかった。しかも、この触手は自分の意思とは関係なく動いているようで、先程斬り合っている最中に聞いてみたら、自動で動いているとのこと。なんだそれは。絶対防御とでもいいたいのか。そのうえ、死角側から触手同士で息の合った連携攻撃を仕掛けてくるので、非常にやっかいである。

対する影虎の異世界樹ユグドラシルは半手動セミオートなので、あまり分がいいとはいえない。

様々な角度で襲いかかってくる触手に対して翼で応戦しなければいけないし、こちらの攻撃を恐れずに斬りかかってくる祥吾本体に対してはそこらへんの物で錬成した二本の剣で対応する。

翼の方はある程度勝手に動いてくれるので祥吾本体の方に集中できるのだが、何分相手の方が本数が多い。鎌状三本の触手でこちらの攻撃を防ぎ、槍状の触手でこちらのスキや死角から攻撃してくる。そしてこの触手、攻守が逆転する時も多々あるので、かなり攻略しづらい。

ただ、この6本の触手はつきりいつて防御にはあまり本数を回さ

そうかと言って防御が薄くなった瞬間を全力で狙うものの、恐るべき反応速度で、こちらの攻撃を防ぎにきやがる。

そういつた障害物を突破して祥吾は影虎の身体を何回斬る。傷自体は異世界樹で治癒しているので、総合しても大したダメージにはなっていない。むしろ回復させるために演算する事が精神的な疲れになってきている。そのせいで僅かばかり動きが鈍っている気がする。

祥吾には即効性の回復手段は無いはずであり、いままでにも相当なダメージを負っているはずなのだが、頭や手から血が流れているだけで、全く攻撃の重さと速度が衰えないのである。

「てめえ……いい加減に……」

「くたばりやがええええええ！！！！！」

「それはこっちの台詞だド三流!!!」

対する祥吾は抜刀術で影虎を迎え撃つつもりのようだ。

「な!?!? こんなときに!」

影虎は『異世界樹^{ユグドラシル}』の使い過ぎで、三歳児並みに身体が縮んでしまった。

「勝機あつたな——ぐっ!?!」

これで俺の勝ちだ。という顔をした祥吾だったのだが、今までのダメージが一気に出てきたのか、急に膝をつき西洋刀を地面に突き刺し、何とか自分の体を支えている状態だった。

「てめえ…今度あつたときは…ぜってえ食い殺してやるからな…!」
影虎は祥吾に向けて、中指を立てる。

「ふん、バカめ…お前程度のカキがどう足掻こうと、最後に勝つのはこの俺、死神・岩見祥吾だ!」

逆に祥吾は見下したような表情を浮かべる。

どちらも、まだ負けるつもりもなく相手を殺す気にいる。

「それにしても、お前の他に伝説扱いのレベル6が五人もいるなんてな。今度そいつらにあつたら、伝えておけ…俺の前に現れたらその小綺麗な顔を破壊するってな!」

祥吾はついさっき影虎を斬りつけた時に知りえた影虎以外の化け物達^{レベル}(6)に向けて宣戦布告をした。

「ハッ…バカ言ってるじゃねえよ…俺に勝てねえテメエがあの人五人に勝てるわけがねえ——ん?」

影虎は何となく自分が墓穴を掘っているようで気がしたので、訂正する。

「おい、てめえが余計な事言うから、俺が六人の中で最弱みたいな感じに言っちゃったじゃねえか…どうしてくれる…?」

「知らんな…それは自分に自信がない証拠だ…ボッチ君…」

祥吾は適当に返事をし、先程斬り合った時に知った幼少期の影虎の記憶から影虎をボッチ呼ばわりする。

「余計なお世話だ変態仮面野郎…それに今はボッチじゃねえよ…ていうかむしろお前がボッチだろ…」

そして、お互い相手の顔を睨みながら、ニヤリと笑った後、

(こいつの顔面は必ず破壊する!!)(コイツは絶対食い殺す!!)

二人がそう互いに心の中で、宣言した瞬間、祥吾の背後にいつぞやの真理の扉(仮名)が現れた。一応扉と言っているが、形は扉というには程遠い空間が裂けたような穴であったのだが。何となくそれっぽいから、呼称を扉にしたのであった。

「ん？ またか、まあいい。影虎」

前と違って抵抗せず、そこから伸びてくる手に身体を任せ、影虎の名を呼ぶ。

「なんだ、死神？」

律儀にも返答する影虎。

「お前の顔面を破壊するのはこの俺だ。それまで、絶対死ぬんじゃないぞ」

熱血バトル漫画の主人公みたいな台詞を残し、祥吾は穴に飲み込まれていく。

「クソツタレが。勝手な事ばかりいいやつて」

「さてと、そろそろ帰るかな。でなきゃ椿に燃やされちまう」

あ！やべ！予想してたけど、卵割れてるう！といいながら、一真の家に帰ろうとしていたら、担当医の『桜井忍』から携帯に電話がかかっていたので出てみると、何やら椿達三人が影虎を探してい

る途中に忍者のような能力者に襲われて、今は自分の病院にいると
のことだった。

それを聞いた影虎は三歳児の身体ながらも、大急ぎで病院に向か
った。

第5話「感染捕縛（キャプチャーウエブ）」（後書き）

次回は祥吾の謎の力が明らかになるかも？

オリキャラ募集の件について

今まではあまりにも漠然としていたので、今度はテンプレを用意して引き続き募集。

名前：

年齢：

容姿：

職業：

性格：

生い立ち：

生活：

知能：

身体能力：

人間関係：

一人称及び二人称：

能力の有無及び詳細：

弱点：

殺人鬼である岩見祥吾への関心：

好みのタイプ：

備考：

この他にも追加設定はOKです。

例えば主人公の岩見祥吾だとこんな風になります。

名前：岩見祥吾

年齢：27歳

容姿：いつもシンプルな形の般若の仮面（口の部分が開いているので、つけたまま飲食も可能）を着用しているが、外すと火傷の跡（家が放火された際に左眼辺りを火傷）があるものの意外に整った顔立ちである。その醜い傷を隠すため、仮面をとろうとしない。取ろうとすると例え誰であろうと、極めて冷酷で殺意に満ちた目で威圧する。身長は174cmぐらい。後の特徴といえば、黒のビジネススーツ、白い汎用手袋と黒色の革靴ぐらいか。

職業：警備員
アンチスキル

性格：人と接するときに、愛するか殺すか無関心かという極端な感情しか持てない。基本的に好戦的で、感情の赴くままに多くの人間

を理由なく殺害し、数多くの人物から「人間じゃない」とまで称されている。その生い立ちから銃を持つ警官複数を生身で倒すなど、戦闘能力も極めて高い。その暴虐さゆえ「射殺止むなし」とまで言われている。

家族が殺害されて以降は、「泥を食ったことがある」と語るなど浮浪者のような生活をしてきたらしく、その名残からかトカゲを焼いたり、生卵数個をコップに割って一気飲みしたり、ムール貝を殻ごと食べたたり（噛み砕いたが飲み込み切れなかった貝殻の破片は流石に吐き出す）と、人間の域を超えた悪食ぶりを見せる。しかし、最近は学園都市に住居を持つているせいか、自宅周辺のコンビニを強盗し、食料や生活用品などを大胆に盗ってきている。時々、スキルアウト達から殺して奪った札や硬貨を強盗した店に代金として置いてきている。

また途中で辞めているとは言え、高校や仕事をしていた事もある他、自動車を運転する際はちゃんとシートベルトをし、焼きそばを食べる際はお湯を捨てるなど意外と律儀なところもある。そして意外にも女性や子供には優しい。でも、あまりに身勝手・理不尽・ふざけた人だとイライラして殺そうとする。

案外好きな人には尽くす性格で、その時はイライラもなくなっていく。その人が危険に陥るなら自分の命を顧みずに助けにいたりもする。基本美人であれば仲良くなろうとするが、性格がわがまま・高飛車・イラツとするような言動などであれば脅して従順にしようとする傾向がある。そして相手に対するイライラが一線を越えれば殺そうする。インデックスあたりが危ないかもしれない。

特に無理難題でもない限り女性の頼み事は基本的に聞く。理由は「好かれないから」であり、これは幼い頃に家族が殺されてしまい、愛されることがなくなってしまったからだと考えられる。

上記の通り男性に関しては基本「殺す」対象ではあるが、心を開いた者は例外であり、食事に誘うほどにまで仲良くなることが可能である。ちなみにサディスト。酒には強く、酔った奴を肴にするレベ

ルではあるのだが、自分からは飲む事はない。飲まないかと誘われた時のみである。超能力への関心は殺すが面倒になる程度。魔術に關しての知識は全くの皆無である。お酒はあまり自分からガバガバ飲むタイプではなく、誘われたら飲む、というより誘われたら大抵の事は快く乗ってくれる。特に美少女のお願いなら尚更。ノリはいほうである。でも、性格が酷い場合はキツパリと断りる。

生い立ち：20年前に無差別放火魔によって住んでいた家と家族を失い、復讐の為に自分もまた無差別殺人鬼になるという過去を持つ。現在はもちろん全国指名手配犯である。ちなみにすでに仇である放火魔は自身の手で殺害済みの様子。何度か政府要人暗殺請負人「死神」として殺人をよくやっており、その他には密偵のお仕事も数回行い、その際の成果は上々のもの。そのどちらも気まぐれでやっていたようで、報酬は現金、しかも携帯できる量と依頼人に釘をうっていた。現在は第10学区のボロいアパートの住民を殺害し、その部屋に住んでいる模様。

生活：浅倉威と名乗っているときは警備員をし、般若の仮面を被り死神として行動している時はコンビ二強盗やスキルアウトの虐殺をしている。

知能：目的のために他人を幾度となく騙して利用するなど、頭も非常に回り戦闘時にもその傾向がみられる。

身体能力：膂力に関しては、並みの能力者を圧倒するレベルである。戦闘力を能力者レベルで表すと、軽く見積もってもレベル4上の上クラスに相当し、最悪レベル5上の中クラスであると噂されている。刀を主に使うが我流で、「斬る」や「突く」というよりは、「叩きつける」といった豪快な力押しでの戦闘を好む。そしてこれが通用しない場合は、抜刀術や突き技にすぐさまシフトする。瞬発力や短

距離の移動速度については武術を極めた人間でも見切るのは難しい。長期戦も苦手ではないが、面倒なので避ける傾向がある。常に戦いの中に身を置いていたため、眼光が鋭く、大抵の者はこれを見るときはしばらく動けなくなる。ちなみにこの眼力、リラックスしている時は緩む。身体能力に関しては、一般的な常人のそれとは比較にならないほどに高い。西洋刀なしでの戦闘を行うことも可能で、どこで学んだのかは不明だが、主に拳法を使う。（殺しを目的とする戦闘を行う場合、決まって「イライラするんだア・・・！」という言いながら、首を回すという癖を持つ。）

人間関係：御坂、黒子、佐天、初春の四人とは知り合い程度。妖怪のぬえとは一度、一つ屋根の下で寝たが、やつちゃったみたいなのではない。

一人称及び二人称：俺、お前又は相手の名前

能力の有無及び詳細：今の所はなし

弱点：何だかんだ言って、可愛い女の子には甘い。

好みのタイプ：性格は従順で髪型はボブカットに近いもの。それ以外は特にこだわっていない。（胸に関しては特に選別基準ではないが、どちらかというと大きい方がいいらしい。）五和のような子が好きの様子。次にオルソラや佐天だという（佐天はボブではないが、性格が気に入る模様）。年齢で考えると中高生が好きで、熟女や人妻は嫌い。

備考：通称死神。名前の由来は上記のような外見に加え、容赦のない連続無差別殺人が原因だと思われる。活動範囲は学園都市全域。そして神出鬼没。が、戦いが起こっている場所には血の匂いを嗅ぎ

つけて高確率で現れるようである。

あと一人何人でも可能です。

まあ、こんなもんですかね。あと本編の方の続きはまだしばらく先になりそうです。

以下キャラ崩壊あり。

祥吾「俺の設定が初期と比べて変更されているな」

作者「大抵のキャラクターってそんなものよ」

祥吾「そんなことより早く続き描いて更新しろよ」

作者「悪いな、頭の中でシナリオチャートは出来てるんだが、個々の台詞や地の文の素敵な言い回しにしようと思ってるんだ」

祥吾「いや、適当でいいから早くしろよ。お前の小説楽しみにしてる奴が少なくとも30人もいるんだぞ！」

作者「バカ野郎おめえ、だからこそ一文一文凝って書いてるんだろうが！そんな適当に書いたら駄作になるだろうが！」

祥吾「それなら2500文字ずつでいいだろがよ！この毎分500文字読めば5分くらいの丁度いい時間で読めるじゃんかよ！」

作者「いや、それだと短い気がしてな。しかも弟に負けた気がする

し。だから自分がキリのいい所まで書いたら更新するようにしてるんだよ」

祥吾「おめえの勝敗なんて聞いちゃいねえ！

／（＾○＾）／

いいぜ

—

／

（＾○＾）／ てめえが何で

も

／（ ） 思い通りに

出来るって言うなら

（＾○＾） 三 ／ ／ >

＼ （＼＼ 三

（／○＾） < ＼ 三

（ ） ／

／ く まずはそのふざけた

幻想をぶち殺す！」

作者「おめえがまずふざけてるよ！」

祥吾&作者「どうもありがとうございましたー」

祥吾「いや、コントの挨拶はいいからさ。本当に早く更新しろよ？」

作者「ああ・・・想像屋さんをはじめとする読者の皆様、本当に申し訳ありません。必ず完結はさせますので、長い目で見守ってください。次回の番外というか繋ぎは、影虎達を始めとする他作品のキャライメージについて話し出すかもしれません」

オリキャラ登場話に関しての大切なお知らせ（前書き）

幕間第二弾。

オリキャラ登場話に関しての大切なお知らせ

作者「読者の皆様に大切なお知らせがあります」

祥吾「お知らせって何ぞ？」

作者「祥吾、お前も知っての通りこの小説は読者参加型で、常にオリキャラを募集し、読者をより参加しやすくしているわけだ」

祥吾「そうだな」

作者「常にオリキャラ募集をしているから、作者と読者の距離が他の小説をよりも比較的近い。だが、やはり距離は近くなっても距離は距離。投稿されてきたオリキャラを物語に登場させるときに齟齬が生まれてしまう」

祥吾「具体的には？」

作者「想像屋さん著作『とある正極の異世界樹』主人公『桜小路影虎』は知っているな？」

祥吾「当たり前だ」

作者「その影虎の能力のひとつである異世界樹ユグドラシルの使用描写を間違えてしまったわけだよ。そしてすぐに指摘された」

祥吾「ああ、手動じゃなくて半自動ってやつだろ？」

作者「こんな事が続いてしまっただけはオリキャラを投稿してくれた読

者にかなり失礼にあたる。だから作者は一つの方法を思いついた」

祥吾「ああ、昨日やったアレ？」

作者「そう昨日やったアレだ。次の6話には影虎同様に『とある正極の異世界樹』の登場人物『桜井忍』が出るので、忍の言動・行動に間違いがないか想像屋さんに確認をしてもらうため、メッセージで忍が出るシーンの話をサンプルとして送ったわけだ」

祥吾「で、思いのほか高評価だったわけだな？」

作者「ああ。だから、これからもこの方法を使っていこうと思ったわけだ」

祥吾「簡単にまとめるとこういう事だな」

読者：オリキャラ投稿

←

作者：オリキャラ認知&採用

←

作者：オリキャラ登場話のシナリオチャート考案↓作成

←

作者：シナリオチャートを、オリキャラを考えてくれた読者にメッセージで送る。

←

読者：シナリオチャート承認↓メッセージ返信にて作者へ通知。

←

作者：通知確認、本格的に作成開始。

←
作者：完成品をサンプルとして読者へとメッセージで送る。

←
読者：完成品を承認、返信にて作者へ通知。

←
作者：完成品を投稿。

祥吾「こんな感じか？ まあ、作者のきまぐれで手順が増えたり減ったりしそうだが、いきなりひどい状態から見るとよりはマシだな」

作者「まあ・・・うん。作品を一足先に読めるから何となくちよつと得した感があったりなかったりするぞ！」

祥吾「そんなことはどうでもいい。さっさと6話を投稿しろ」

作者「耳が痛いぜ・・・」

直人・大牙・叶・国屋・綾瀬・我門「出番マダー？」

作者「後しばらく待っててや・・・」

オリキャラ登場話に関しての大切なお知らせ（後書き）

オリキャラ以外にも、読者の要望は受け付けていますのでお気軽に感想欄にご記入くださいね。

第6話「幻想境界（ネクロファンタジア）」（前書き）

作者「やっと6話目投稿できました」

祥吾「本当にやつとだな・・・」

作者「皆様お待たせしてしまい、本当に申し訳ありませんでした」

第6話「幻想境界（ネクロファンタジア）」

「一体何者なのかしら・・・」

ここは学園都市第七学区のとある病院の病室。その一室で『桜井忍』は無意識のうちに思った事を呟く。先程影虎達から聞いた蜘蛛のような忍者と、現在この学園都市に潜む連続無差別殺人鬼・通称死神、岩見祥吾との関連性についてだ。

（椿ちゃんから聞いた話だと蜘蛛の忍者は感染症を操る能力を持つと言った）

その今までに類をみない能力のせいで、今は忍のそばで規則正しい寝息を立てている一真と葵の2人は一時、意識不明の状態に陥るほどだったらしい。運ばれて来た時には何事かと思い椿から事情を聞いた。

その内容は、椿が影虎の危機を本能的に感じ取り、駆けつけようとしたところに蜘蛛の忍者が現れ行く手を阻んだ。しかし、すぐに追いかけてきた一真と葵の援護によって一時的有利になったものの忍者は特に慌てる様子もなく2人を能力で昏倒させ足止めを続けた。ただそれだけなら十分に椿に勝算があつたのだが、そこに新手が現れた。

姿が見えなかったせいで、本人にもいまいちよく分からなかったらしいのだが、どうやら精神操作系の能力者で、名はオデッサ・エイとのことだ。こいつのせいで、椿は身体を乗っ取られてしまったが、そのすぐ後に椿がキレた事によりオデッサは身体を離れ、これはまずいと感じた忍者は椿を巻くために煙玉を地面に向かって投げ逃走した。

椿としてはすぐにも影虎の元へ行こうと思ったらしいが、2人の大切な友人を外に放置して行くわけにもいかず、急いでこの病院へと向かってきたというわけだ。その後すぐに、忍は椿が心配していた影虎本人の携帯に連絡し、ここへ来るように伝えた。そして、本人が到着したが、一目見るなり忍は驚いた。なぜなら、影虎の身体が3歳児並みまで縮んでしまっていたからである。これは彼の超能力の弱点で、影虎が異世界樹^{ユグドラシル}を使いすぎた際に起きる現象なのだ。

それほどまでに力を使わなければならなかった理由を聞くと、なんでもつい先程、この学園都市中で話題の殺人鬼・岩見祥吾と殺り合ったらしい。ヤツの飛びぬけた残忍性と戦闘能力は忍も耳にしていたが、まさか影虎が幼児化するまでに追いつめられるとは思わなかったのだ。しかも、影虎の話聞く限り、ヤツは背中に奇妙な正体不明の翼を生やし、影虎の攻撃の一部を無効化し、最後には次元の裂け目のような物が現れ、瀕死の祥吾を連れていったらしい。

いよいよもって化け物じみてきた岩見祥吾。そして、この話を近くで聞いていた椿はまさに怒り心頭といった感じだったのだ。その椿を影虎がなだめている間に忍は、それまで聞いた話を整理し、こう結論付けた。

『蜘蛛の忍者とオデッサという能力者が椿ちゃんを足止めしていた理由は、影虎と戦闘をしていた岩見祥吾に近づけさせないようにし、そして影虎との戦闘の最中に力を覚醒させる為』

前に影虎達がヤツに遭遇した時はその正体不明な翼は生えていなかったらしいので、おそらくこれが理由だろう。しかし、その先の目的が分からない。分からないといえば、椿の話に出てきたオデッサ^{サ・エイ}という能力者。確か蜘蛛の忍者に『魔族の現女王』と呼ばれていた。魔族というのは本当に文字通りそのままの意味だったの

か、それとも一種の比喩表現だったのか？ある意味どちらにも取れるが、おそらく前者。椿の身体を乗っ取ったという事実。そして忍自身がそういう幻想とされているものをよく分かっているからであった。

幻想といえば、影虎が出会った封獣ぬえという妖怪少女。聞くところによれば、岩見祥吾の正体不明の翼はこの少女と同じだったという。彼女がこの件に関わっている可能性が大きいと思われる。というよりむしろ、蜘蛛怪人のような忍者、魔族の現女王らしい実態のないオデッサときて、妖怪である彼女が今回の関わってないと考える方が不自然だと思う。時に彼女は岩見祥吾の姿に何かしらの能力で擬態していたらしい。この辺りまでくればどう考えても完全に黒である。

ちなみに余談であるが、殺人鬼であるはずの岩見祥吾はぬえと仲がいいらしく、影虎が彼女を殺そうとした瞬間、猛スピードで突撃してきたせいで、本人曰く『死にかけたらしい』が、おそらくこれは彼の比喩表現であるため、あまり気にはしなかった。

影虎と椿の2人には今後再び襲撃があるかもしれないから気を付けるように伝え、家に帰らせた。

そういえば、どこから入り込んだのか——ひらひら飛んでいる虹色の蝶。

忍は連中の目的を考えようと、近くにあった椅子に腰を下ろした瞬間、

「うぐう…？」

「う——」

苦しみ始める一真と葵。

それはとても嫌な感覚だった。

とても嫌な、掻きむしられるような『嫌』だった。
身体中をめぐる血が熱をおびている。頭が痛い。なんだこれは。
どうして一真と葵が。

「嫌……」

嫌な予感がする。瞬きをしているうちに世界が地獄に変わっていきそうな。

最悪。最悪な予感。

「一真君！ 葵ちゃん！」

—— 狂い踊れ。

—— 乱れ狂え。

—— 獣のように。…なんてね？

艶やかな—— 甘ったるくて、そのくせ不安になるような音律を無視した歌が響いた。誰の声？どこから聞こえる？視線を周囲に彷徨わせ—— やがて忍は天井近くの飾り窓、さっきまで虹色の蝶が漂っていた場所に座り込む人物を見た。

それは奇妙な少女だった。不思議に曖昧な存在感。目は虚ろ。表情は掴みどころがなく、声はただ蠱惑的に甘い。妖精のようだ。虹色の髪は長く伸ばされ、額からは触角が生えている。そして背中では—— 蝶の羽が動いている。

誰だ——？

思いながら同時に。

「う——」

忍は、理解していた。

あれは危険だ。あれは危険だ。あれは危険だ。
危険だ危険だ危険だ。

「——う…？」

その単語。『危険』という言葉が意味も理由を超越して頭に叩きこまれる。危険だ。こいつはやばい。人間じゃない。化け物でもない。ただ危険だ。なんだ——あいつは？

はっ、と『危険』な人物の威圧感に飲まれていた忍は思考を取り戻し、自分がすべき事を思い出す。今、一真と葵の2人を守るのは自分しかない、そう思い相手に注意を向けながらゆっくりと、しかし確実に一真達と突如として現れた人物の間に割って入る。

蝶のような虹色の髪の少女は悪戯^{いたずら}っぽく口に手を添えて笑うと、名乗りをあげる。

「初めまして、こんばんは。魔法少女です。名前は——平塚雷蝶」
にやにやと笑って、雷蝶は自己紹介をする。

「で、その魔法少女の平塚雷蝶さんが、ここに何のようなのかしら？」

——この雷蝶とかいう少女、意味もなく危険というか、警戒心が刺激される雰囲気がある。

「あはっ、『来るべき災厄』に備えて、ちょっと貴女の子供達とかを——」

最後まで聞かずに、忍はその凶悪な威力を持つ拳を雷蝶の顔を目掛けて殴りかかる。

しかし、拳はかすりもせず、空を殴る。雷蝶が何処かへ霧のように消えてしまったからだ。だが、忍はうろたえることなく、どこに現れてもいいように拳を構え直し周囲を警戒する。

「子供達を…なんですって？」

「おお、こわいこわい。さっきの続きだけど——利用させてもらうわねん？」

真後ろに現れた雷蝶を再び殴りかかる忍。今度も露散するかによ

うに消えてしまい、拳は手応えの何もない場所を殴る。

「あなたは一体何を企んでいるのかしら？」

「あはっ、夢と希望の魔法少女が何かを企むだなんて——とんでもない言いがかりだねん？ まあ、いいけど？」

これ以上殴つても無駄だと思ったのか、その声に殺気は籠こもっていなかったが以前構えを解かない忍。それに対していつの間にか現れた雷蝶は近くにあつた椅子に腰かけ、足を組み、こちらを見る。

「なら質問を変えるわ平塚雷蝶。蜘蛛の忍者とオデッサ、封獣ぬえ、岩見祥吾。この4人は貴女の仲間なの？」

「イエ！イエ！イエ！ 流石は桜井忍！ あの『化け物』達の母親だけはあるのねん！ まあ、それくらい分かつてもらわなくちゃ面白くないしね？」

忍のこめかみにいくつもの太い筋が浮き出るが、こいつのペースに乗せられないようにこのふざけた電波少女を殴り殺したいという本能を抑える。

「でも、100%つて訳でもないのよねん。 蜘蛛 とオデッサはそうだけど、ぬえちゃんと祥吾君は違うわねん。もつとも祥吾君に関しては『戦争』前にこっちについてもらつつもりだけどねん？」

「戦争…ね。それにしても、絶対に起きるのを断言したような口ぶりだこと」

雷蝶がいった戦争という人類が持つ永遠の問題について忍はぴくりと反応し、眉を潜ませる。

「ええ、起きるわよん？ 今年の10月中旬…あと三ヶ月ぐらいかしらねん」

どこか楽しそうに笑って雷蝶はこちらを見続ける。うつろな、昆虫のような双眸そうぼう。何も考えていないようにも見えるし、裏の裏まで読んでいるようにも見える。

「ま、とにかく——私は確実に来る最悪の未来、『来るべき厄災』に備えて、貴女の子供達とかを使って——予想されるその時の為に、祥吾君を成長させるわ」

「『来るべき厄災』……?」

さつきも雷蝶が言った聞き覚えのないその言葉と、またも子供達を利用するという雷蝶の宣言に忍はこめかみに手を当てながら怪訝な顔をする。雷蝶を睨む目も余計鋭くなった。しかし、無視するように、雷蝶は甘い毒を含んだ声で囁くのみ。

「育てて、祥吾君のチカラでは『来るべき厄災』生き延びられないと分かったら——私達が祥吾君の身柄を拘束して、とつてもとても安全な場所に隔離して保護して、家族みんなで最後の時を静かに待つわん」

夢を見るように微笑んで、彼女は両手を静かに広げる。

「hallelujah! ^{ハレルヤ} じゃ、そういうことで私は失礼するわん。一応貴方に断りも入れたしねん」

そっぴいなながら、雷蝶は病室の窓から何事もなかったかのように帰ろうとする。しかし、それをみすみす許すほど、元学園都市最強の不良・初代「牙桜」ではない。

「待ちなさい! 平塚雷蝶!」

せめて、一発だけでもその整った顔を殴らせろと言わんばかりに拳を強く握り締め、雷蝶に殴りかかる。

「っ!?!」

しかし、予想通りというかなんというか雷蝶は霞のように消え、やはり拳は何もない場所を通りすぎる結果になった。

そして、去り際に雷蝶はこう言った。

——親は子供達同士の成長を静かに見守ればいいのよん?

「一体どういう意味よ…？」

忍は親指の爪を噛みながら呟いた…。

一方その頃祥吾は。

「ん？　ここは…？」

目が覚めた祥吾は起き上がってあたりを見回し、ここが和室だと認識する。顔を触り、般若の仮面を着けている事を確認すると、次は自身の命ともいえる西洋刀を探した。思いのほかすぐ近くに置いてあり、奇襲が来ても充分に迎撃できる距離である。

どうやら自分は誰かに布団へ寝かされていたらしい。
でも一体誰が？

「どうやら起きたみたいね。ここは幻想郷のとある気まぐれな妖怪の住処よ」

不意に――声が聞こえてくる。妖艶な、ようえんそれでいて幾重もの曖昧さを含んだ総てを見透かされるような、そんな声。

声のした方に顔を向けると、そこには裂け目があった。祥吾を二度飲み込んだあの裂け目。その裂け目が開き、中から『少女』が出てきた。祥吾は情報を得るため、その出てきた『少女』に色々聞き出す事にした。

「あんたは？」

『少女』は毛先をいくつか束にしてリボンで結んだ金髪ロング。八卦の萃と太極図を描いた中華風の服。手には扇子を手にならして、頭にはナイトキャップを被っている。

「私は八雲紫。『神隠しの主犯』と言われますわ」

そういえば、ぬえの奴がこいつの口車——と言っているのか定かではないが——に乗せられて学園都市に迷い込んできたらしいし、なにより黒幕のカリスマというか、ラスボスのような風格がある。この二つ名の主犯は的を射ているのかもしれない。

「俺は——」

「岩見祥吾。27歳。7歳の頃、家族全員を放火魔に焼き殺され、自分も顔に火傷を負う。12歳の時に人斬りに目覚め、19歳になると、その事が世間に知れ渡り、指名手犯となつてしまい今に至る」
紫は祥吾の言葉を遮り、祥吾の生い立ちを一通り述べる。火傷のあたりまでは小学生1年生時のクラス担任、または祥吾の叔父や近所の住民達から聞けば分かる事だが『12歳から人を斬り始めた』という情報は世間一般では知られていない。何かしらの情報網があるのかもしれないが、紫は自身を妖怪と言ったのだ。ぬえのような正体不明な力を持っていても不思議ではない。

「なんで、あんたが知ってるんだ？」

どうみてもそう易々と答えそうもない雰囲気をしていたので若干躊躇^{ためら}ったが、何事を行動だと思ひ祥吾は紫に一応聞いてみた。すると紫は簡単に教えてくれた。

「私もつい最近教えてもらったんだけどね。この事を教えてくれたのはあなたの事を昔からよく知っている人よ。これ以上は本人から口止めされているから言えないけど・・・いずれ会う事になるわ。それも近いうちにね」

一体誰だろうと祥吾は脳内検索をかけるが該当する人物はいない。ただ一人を除いて。

20年前、祥吾に希望を与えてくれた虹色の髪を持つ蝶のような少女。あの少女が祥吾の過去を紫に教えたのだろうか？

この紫という人物あまり信用できないが、他に少女に関する手掛かりが全くないため、ひとまず信じる事にした。

「なら俺は、それまで気長に待つとするさ」

紫のいう通りならば自然と会えるらしい。もともと、紫の言った『近い』が100年も経たないうちに死んでしまう人間の時間感覚に合っていればの話しだが。

これはぬえから聞いたのだが、妖怪は長寿ゆえに時間の捉え方が人間とまるつきり違う。数十年単位で『最近』等の会話が始まるらしい。それにぬえだって1000歳であの子供じみた精神なのだ——あれが演技だったら恐ろしいが——明らかにぬえよりも大人の女性の魅力が漂っている紫はかなり歳がいつているのだろう。

だが、もちろんそんな事は口が裂けても言えない。時を重ねた女性性は年齢に関して敏感になるらしい。それに紫はおそらくは上位の妖怪——下手に口を滑らしたらどうなるか分かったものではないぬえの話によると精神の成熟は妖怪によってピンキリらしいが、どちらにしろ言わない方が得策だろう。

「あら。今まで通りいつもと変わらない平凡な毎日を送るつもりなら、それは無理ね」

祥吾が考えている事を知ってか、知らずか、扇子で扇ぎながら何てことないように紫はいう。

「だってあなたに『お願い』があるから、ここに連れてきたんですもの」

その『お願い』は簡単に終わられるような事ではないと祥吾は悟る。

「なるほどね…断る余地はなさそうだな」

祥吾は仕方ないといった感じで肩をすくめる。

「へえ、よく分かってるじゃない。流石は『あいつ』が推していた通りって事かしら？」

あいつというのはおそらく紫に祥吾の過去を教えた人物の事だろ

う。

「で、そのお願いってのは何なんだ？ 出来れば誰かを殺したいって感じのヤツを頼むぜ」

祥吾は今まで何度か殺人依頼を受け、成功し続けた事があり、願わくば今回もその類たぐいならばと思う。

「まあ、私としてもその方が手っ取り早くて助かるんだけどね。だけど、それを行うには余りにも情報が少なすぎるし、実力も足りないわ…あの『アレイスター・クロウリー』を殺すにはね」

はつきりいうと祥吾はアレイスターの事がどこの誰なのか全く分からなかったが、探偵のようにひとつひとつ調べてから殺しに行くのも悪くないと思っていた。

「だから現状はあいつの計画を手が届く範囲でいいから邪魔してほしいの。そして、隙を見せたら殺ってちょうだい」

「ああ、わかった」

紫からの頼み事に二つ返事で答える。

情報がないなら集めればいい——まあ、もつとも祥吾が思っていたその収集方法は強引で力押しなものばかりだったが。

「あ、そうそう。あなたにはこの世界、『幻想郷』について教えておいた方がいいわね」

「幻想郷？」

祥吾は聞き覚えのない単語に疑問を浮かべる。

「ええ、そうよ。ここはね…」

そして紫は幻想郷について話し始めた。

紫から聞いた話をまとめるとここ幻想郷は、日本の人里離れた山

奥の辺境の地に存在しており、妖怪などの人外のものが多く住んでいるが、僅かながら人間も住んでいる。

幻想郷は強力な結界によって幻想郷外部と遮断されているため、外部から幻想郷の存在を確認することはできず、幻想郷内に入ることもできない。

同様に幻想郷内部からも外部の様子を確認することはできず、幻想郷から外へ出ることはできない。そのため、幻想郷では外の世界とは異なる独自の文明が妖怪達によって築き上げられているらしい。なお、幻想郷は結界で隔離されているものの、異次元や別世界といったものではなく、幻想郷も外の世界も同じ空間に存在する陸続きの世界である。幻想郷は内陸の山奥に位置するため、幻想郷内に海は存在しないのだそうだ。

幻想郷は元から結界で隔離されていた訳ではなく、単に「東の国にある人里離れた辺境の地」がそう呼ばれていただけであった。幻想郷には妖怪が多く住み着き、ここに迷い込んだら最後、妖怪に喰われてしまうとして恐れられていたため、普通の人間は幻想郷には近づかなかった。しかし、中には妖怪退治の為に幻想郷へ住み着く人間もいた。そして月日が流れ、人間達は文明を発展させその数を増やしていく。

500年前、人間の勢力が増して幻想郷の社会のバランスが崩れることを憂いた妖怪の賢者・八雲紫は「幻と実体の境界」を張り、妖怪の勢力を他から取り込むことでバランスを保った。やがて明治時代になると、近代文明の発展とともに非科学的な事象は「迷信」として世の中から排除されていき、幻想郷はそこに住み着いた妖怪達や一部の人間達の末裔と共に、強力な結界——博麗大結界というらしい——の中で生きる道を進むことになる。そして幻想郷の存在は人々から忘れ去られていった。

現在の幻想郷には以前と変わらず多くの妖怪達と僅かな人間達が住んでいる。結界によって幻想郷が閉鎖された為、外の世界とは異なる精神・魔法中心の独自の文明を築き上げてられていた。博麗大結界が張られた当初、妖怪達は反発したが、現在は結界で隔離される有用性を理解して、好んで幻想郷に住んでいる。またスペルカードルールという争いの平和的解決法が出来たため、決闘そのものは安全とは言い切れないものだが、問題が後に尾を引かない恨みっこなしの問題解決がなされるようになった。

現在の幻想郷は、人間と妖怪とのバランスの関係により、昔に比べると妖怪が幻想郷の人間を食う事はほぼ無くなっており、妖怪が人間の里に遊びに来たり、人間が妖怪の家にお呼ばれる世界となっている。ただし、妖怪が人間を襲い、人間が妖怪を退治すると言う関係はそのまま残っている。幻想郷全体の力と均衡を保つため、擬似的・形骸化したとしてもこのような関係は残さなければならぬという。

ところがここ数年、妙な出来事が起こり始めた。それは「幻想入りする人間の急激な増加」である。本来ならば博麗大結界があるため、外の世界の人間が幻想郷の内部に入り込む事は基本的にできない。しかし、何らかの理由によって外の人間が幻想郷に迷い込む事があり、これを神隠し——幻想入りという。一度幻想郷に入り込んでしまった者が生き延びて再び外の世界に戻る事は難しいが、運良く神社に辿り着いて外に出る事ができる場合もある。

しかし、その人間が外の世界で幻想郷の事を話しても、外の人間には信じてもらえない。また人間の里に定住する人間も居て、FM音源（幻想郷では幺楽と呼ばれる）やサッカーなど外の文化が持ち込まれることもあり、新しい文化は幻想郷で一時的な流行になるこ

とが多い。幻想郷への神隠しの主な原因は、八雲紫自身が人間を攫ったり、面白半分で結界に穴を開けたり境界を弄ったりしているためである。外の世界の自殺志願者が迷い込む事が多いらしい。そういう連中は低級妖怪の餌食となってしまうとの事だ。

話しがそれだ。

意図的な場合を除き、幻想入りする頻度としては人口物が数十年に数種類、人が百年に一人いるかいないかぐらいの割合だった。しかし、人口物は最近技術の発達著しい為昔に比べかなりの頻度で入ってきている。こちらは仕方のない事だから紫も気にしなかったが、人間の方はそうもいかない。

ここ数年で幻想入りした人間は数十人に達しているらしい。しかし、これは紫達が認知した数なので、実際は行き倒れたり、妖怪に食われたりしている人間もかなり多いのだそう。そしてこの人間達は定期的に全く同じ場所現れていたのである。

これは明らかに意図的に行われていると察した紫は外の世界へ原因を探りに行った。このままでは幻想郷のパワーバランスである妖怪と人間の均衡が崩れてしまう。それを危惧しての行動である。そして驚くべきことが判明する。

今まで幻想入りをした人間は全てアレイスター・クロウリーという外の科学者が指揮していた実験の一部だったのだ。

「成程ね。だからあんたはアレイスターを殺したいわけか……」
祥吾は納得し、紫の説明を聞き続ける。

以前、幻想郷に月人という種族が攻め込もうとしていたことがあるらしい。その月人は地球の技術力とは比べ物にならない優れた科学力を持っている。しかし、その“月の民”さえ博麗大結界を乗り

越えることができなかった”のに、アレイスター「クロウリーはやってのけたのである。

尋常ではない。あの月の民でさえできなかったことを安々とやり遂げるなど。

そう紫がどうしたら良いものかと、悩んでいるときに「例の人物」が現れたのだ。祥吾の過去を教えた謎の人物。その人物もアレイスターを亡き者にと考えており、紫に対して共闘を申し出たのである。紫も完全に信じているわけではないようで、祥吾の感じた限りでは漁夫の利を得ようとしているのではないかと思う。しかし、当たり前と言えば当たり前である。いきなり現れた人物をそう易々と信じる方がおかしいというものだ。

また話がそれた。

謎の人物はこう提案した。

——こっちは出来る限りの情報と1人の人材を渡すから、そっちは渡した人材を自由に使ってちょうだい、と。

「俺がここに連れてこられたのはそんな事があつたせいかな……」

もちろん渡された人材は祥吾である。自分の知らない所で嫌な取引もあつたものだ、顔をしかめた。紫はそんな事など全く気にせず、話を続ける。

「そういうことよ。それと、幻想郷こくそうきやうの住民はさっき言った通り妖怪を筆頭に寿命が長い連中が大半なの。だから、毎日同じ事の繰り返しで退屈している者も少なくないわ。そこで、祥吾君。さっき頼んだ『お願い』のついででいいから、彼らの暇潰しの相手になってほしいのよ」

「まあ、いいが…俺が不快になるような奴ならすぐに殺す」

「その辺は大丈夫よ。皆、貴方の好みにぴったりだから。それに今のあなたが殺せるようなのは低級ぐらいしかないし、死んでもまたすぐに出てくるから問題ないわ」

紫はなんて事のないような感じで言つてのける。この世界の平均的な強さはどれだけ高いのだ、と祥吾は面倒そうにまた顔をしかめる。

しかし、自分の好みにぴったりとはまるで全員が女の子であるかのような口ぶりである。

と、祥吾が疑問に思ったそのとき、

「ああ、そうだ。後これは話しておかなくちゃいけないわね」

なんだ、まだあるのかと祥吾はウンザリするが、紫はそんな祥吾の態度などには興味はないようで淡々と話し始めた。

「祥吾君、あなたには私の能力…『境界を操る程度の能力』の一部を制限付きで使えるようにしておいたわよ。あ、境界といっても宗教の方ではなくて、事物や領域などを分ける境目のことよ」

てつきりノートルダム寺院等の教会かと祥吾は思ってしまったが、どうやら違うようだ。

そして、紫は説明を続ける。

境界を操る能力とは「境界」と名の付くものならほぼ何でも支配下に置く事が出来る能力。

空間の境界を操って裂け目を作ること、離れた場所同士をつなげてしまう事が出来る（通称スキマというらしい）。

その他にも、水面と言う境界があるからこそ水と空気が分け隔てられており、地平線と言う境界があるから天と地が分かれていると言ったように、あらゆる物事に存在する境界を自由自在に操る事が出来る。

紫によれば物理的な境界だけでなく概念的な境界をも操る事が可能らしく、夢と現実の境界に穴を開けて他人の夢に入り込んだりも出来るらしい。

究極的には、物の存在は全て境界がある事によって成り立っており、あらゆる物に境界が無ければそれは全体で一つの大きな物であり、個々の存在が成立できない。境界を司るという事はこれを司るという事であり、境界を創るという事は新しい存在を成立させ、境界を破壊するという事は存在を否定するという事である。

はつきり言つてこれは対策も防御法も一切存在しない、神に匹敵する力だ。これが行使できるのであれば、アレキスターなど簡単に殺せるのではないか。

祥吾はそう考えるが、すぐに考えを改める。

（そんなにすごい力を使えるなら、事の発端である犯人がアレキスターである事が分かったらすぐに殺しているはず。ということはこの能力にも限界があるということなのか？）

「この能力も万能だけど、全部が全部うまくいくわけではないのよ——祥吾君が使えるようになったのは私の下位互換だから、出来る事は限られてくるわね」

限られてくるとは言つても使えないよりはずっといい。

「あなたのは『境界を扱う程度の能力』といったところかしらね・
・出来る事もスキマを出現させる、他人の過去を見れる、境界を作ったり壊したり事くらいかしら？ まあ、使えばより精度も上がってくるでしょうし、さらに使いやすくなると思うわ」

「なるほどねえ……」

これは後々、紫が話してくれたのだが、この能力は祥吾がぬえと一緒に寝ているときに仕込まれらしく、彼女の『正体不明を操る程

度の能力』の一つである「正体不明の種」をきっかけにして発現したらしい。影虎との戦いの時、ぬえの羽根が祥吾に生えていたり、影虎を斬りつけたときに名前などが判明したのはこのためである。こんなことになっているのなら自分はとくに半妖化しているのだろーと思う、紫に聞いてみたところ、まだギリギリで人間の力テゴリーなのだが、ふとした事で人間と人外の境界線を越え、妖怪化してしまうらしい。

あと、この能力が行使できるのは外の世界、しかも般若の仮面を被っている時のみとのことだ。さっき言っていた制限というのはこれである。しかし、何故仮面を被っている時のみなのか。紫は理由は教えてくれなかった――。

八雲紫 ←

> i 3 4 5 2 0 — 3 6 7 1 <

第6話「幻想境界（ネクロファンタジア）」（後書き）

まだしばらくは幻想郷でのお話です。まあ、禁書サイドのキャラのシーンは書くつもりですけどね？

そこで提案です。現在祥吾は八雲邸にいます。そこで読者の皆様が以下の地名から次の行き先を決めていただくという企画を考えてみました。

博麗神社

紅魔館 1票

冥界

迷いの竹林

妖怪の山

天界 2票

地底界

魔法の森

人間の里

香霖堂

廃洋館（プリズムリバー邸）

太陽の畑

無名の丘

彼岸 1票

各地域でフラグをたてるとそのキャラクターがもれなく学園都市にもやってきます。分からない方は勘で選んでくださっても結構です

よくあと選んだ理由も書いてくれると更新モチベーションがアップします。

お気に入りユーザー登録をしていない皆さんへ

サブタイトル通りお気に入りユーザー登録をしていない皆さんにお知らせです。

ただいま僕はこなつさんが企画した「とある創作の学園都市」というモノに参加中です。興味を持った方は是非ご参加を！

意見交換を目的としたチャットも午後7時から午前1までやっておりますが、変更などがありますのでその際は活動報告で連絡させていただきます。

それと前回の後書きにあるアンケートを答えてもらえるとモチベーションが上がり、本編の製作速度が上がります。

以下 こなつさん作：【企画】とある創作の学園都市より引用。

参加なさる方は必読！

ええと、まずこんな珍妙な企画なんぞに手を出していただいてありがとうございます。大ざっぱな説明はあらずじでしたとおりなのですが、こちらでは細かい説明をば。

とある創作の学園都市とは？

こなつが立ち上げた行き当たりばつたりの企画です。オリキャラオンリー企画。主に戦闘シーンを書いたり書いたり、座談会も面白いんじゃないかなーなんて思います。あつ、『一から学園都市』というのはつまり、既存の能力者は一切居ないよ！ということになります。文は書けないけどキャラ提供だけなら、という人や、絵なら描けるよ！という人でも大歓迎。ぜひ。

参加資格

一切不問です。年齢も関係ございません。
ただ、マナーを守ればそれでいっこうに構いません。

参加方法

こなつ 「ID：113338」 こちらのIDにメッセージを送ってください。

件名に『企画参加』とか書いていただけるとありがたいです。

下記のテンプレをコピーして貼り付け、必要事項を記入してください。

氏名：

ID：

確認した後、こちらの方から小説の投稿方法などを送らせていただきます。

もしわからないことがあればご一報を。

えー、それではいよいよオリキャラ登録方法を。

募集人数

一人5人まで登録可能です。もちろんそれ以下でも構いませんが、どれだけ多くても5人です。

能力の強さ

募集する能力者は、レベル5は6人（あと1人は管理人が登録するので）、それ以下は何人でも可です。

もちろんレベル0でも構いませんが、戦闘企画だということを覚えておいてください。↑今更ですけど座談会（ry
レベル5の枠は埋まりました！

禁止事項

最強設定は原則無しとします。天下のレベル5でも、必ず弱点等を用意してください。
能力の内容については完全オリジナルでも、禁書本作から拝借しても構いません。ただし後者の場合、レベル5の能力を引用するのは禁止とします。

登録用テンプレ

参加表明のメッセージにコピーし、やはり必要事項を記入してください。

【オリキャラ登録】

名前：
性別：
年齢：
レベル：
能力名：
能力内容：
容姿：
性格：

複数の場合はその人数分お願いします。また、能力内容に弱点なんかを書いていただけると嬉しいです。

座談会・雑談について↑NEW！

だいふく様より、チャットルームをお借りしております。ぜひぜひご活用くださいませ。ただし、参加している方優先的にお願いします。

URL: <http://9413.teacup.com/kamachi/chat>

座談会に関しては、日時等は管理人の方で指定する形が多いかと思っています。指定は活動報告等ですのでチェックお願いします。

タイマンで語りたい！なんて人が居りましたら、それは各自こそこそ…というか、各自で連絡しあってくださいな！

お気に入りユーザー登録をしていない皆さんへ（後書き）

念のためにもう一度、前回の後書きにあるアンケートを答えてもらえるとモチベーションが上がり、本編の製作速度が上がります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6192u/>

とある死神の娯楽遊戯

2011年11月29日11時52分発行